川柳杨



No. 642

十一月号

削刊大臣十三手 重参六四二字 昭和五十五年十二月二日発行(毎月一日発行)

日川協加盟

あたたかいご家庭へ、あたたかいおみやげ



ぶたまん やきぎょうざ

豚饅・焼餃子

ゅうまいち

焼売・叉焼饅

大 阪・なんに





TEL (641) 0551

警察庁・警視庁 全国府県警察

《支店・出張店》

なんば高島屋 心斎橋そごう 梅田阪神百貨店 天満橋松坂屋 中之島サン・ストア なんば新川店・新川売店 ドージマ地下支店 ミナミ 地下虹のまち鹿鳴 京阪ショッピングモール 淀屋橋サン・ストア 南海難波駅構内店 近鉄百貨店(アベノ店・上本町店・奈良店・東大阪店

姉妹品大和錦印



来道衣 講道館·御指定 劍道具

早川繊維工業株式会社

大 阪 支 店

大阪市天王寺区伶人町29番地の1電話(779)1690~2番

砂人氏句碑

些か不安を感じながら、 がはせたが、桜だけでなく四季それぞれに変 は如何ばかりと想像しただけでも心踊る思い 前方に静かな池を抱き、桜花爛漫の候に 公園全域小丘となり、その中腹よろしき

るであろう趣きのこの聖地の絶景を瞼に描く

そのたたずまいこそ、砂人さんが生前か

第である

岡県の飯塚市勝盛公園に建立されて、私もそ 去る九月十四日、 近江砂人さんの句碑が福 見

舞

客

F

葉

12

な

b

82

9

1

111

占

滷

C

有

無

を

言

b

t

X

医

者

嫌

61

救

急

病

院

IJ

1

+

ル

抜

き て

111:

話

に

な 1) 不

一田一三夫氏急病

の除幕式に招かれた。春以来の健康不如意に やっと参席の栄を得

> するのである。殊に私にとって、 らこの場所にひかれていたことがわかる気が

を砂人さんはじっと見すえてゆくことでしょ らしいものまで感じて来る。そんな私事の話 地が隣県の佐賀であることも、不思議なご縁 う。ご同慶の至りで心からお祝福申上げる次 親和と隆昌とが一層固く約束されてゆくこと どっしり重さを加え、これからの九州番傘の でなく広く川柳会からみても、九州の地図が 私の出生の 砂人句碑除幕式に参列して

句

70 70 聳 除 ž 慕 思 儿 季 V 2 出 れ き ぞ 3 む n 13 用匈 展 な

<

風

b

び

旬

中 島 生々

Ш 柳 塔 + 月



水煙抄 川柳塔 津軽 砂人氏 秀句鑑賞工(水煙抄) ■川柳太平記30 二世 川柳塔 句碑 起内恒久・鈴木 黄・室山三柳・故岡田 天江 勇・清 博美・八木敬一・西原 計風 柳多 留 廿 五 篇研 究 (三一丁) …………… と「浪華」 同 [入作品) 一川柳と桃井庵和笛 月号 黄・室山三柳・故岡田博美・八木敬一・西原 佑 目 新之助・酔 次 河 中 菊沢小松園選… 中島生々庵選… 島 亮・青木迷朗 凡九 生々 ・鬼 日 大 甲 郎 庵:: 満… 2 27 26 28 4 1 24

津軽 と「浪華

藤 甲 吉

I

われて古都奈良を修学旅行し、灯の点る頃、 盛大なパーティーの席に招かれた。 大阪に帰り、私如きの者のために設けられた あと、八月二十六日、私は橘高薫風さんに伴 永平寺と比叡山で母と妻の供養を済ませた

町「なにわ会館」と知ったとき、瞬間、 浪華の俳人、博雲斉鷲雪を思い浮かべたので 薫風さんのメモによって、その会場が上本

ある。 俳人、 務雪は、 もちろん私など知る由もな

人であった、ということを「津軽俳諧史」で 読んだ記憶があったからだ。

か、

津軽俳諧には極めて大切な人の中の

巣月居で き「庚申紀行」を書いた。その序は、平安竹 の六月に津軽に来て、滞留二月余り。 ○○)、伊能忠敬が津軽の沿岸測量に来た年 さて驚雪である。鷲雪は寛政十二年 そのと

々の峯をうれしく何々の浦もなつかし―中略らせんかその道すがら一々にかそへ行けは何 れが名をとふ夫山をもていわむか水をもて冠 「博雲斉のあるし津軽往来の記を作りてこ

はたらくうた

(同人特集)

柳五郎·花

40

旬

の背景

(自句自

解

与呂志

・岳人・

君子

.

智子・ 生・公 子·英壬子

薫風

37

Z

長生きをしよう夫婦の合言葉	の俺有の	-	編集後記	路集「浮き沈み」	各地柳壇(佳句地10選)	柳界展望	雅号ぶっちゃけばなし	太田良子さん逝く	大萬川柳「ほどほど」	初步教室	55年度二賞発表句会	川柳塔社同人総会、松江へ行く	愛染帖
北		A	主 :	河神佐	村	į	井	菊	Ш	本	i	島	橘
	路		症 :	村田伯	田		阪	沢	村	田	:	居	高
Ш		M	長薫	日秀越	瓢		東	/]\	好	恵			高薫
越	郎	y 1	氏 風	満峰子	太		天	松	郎	\equiv		白	風
Щ		*	(薫 風) · · (67)	選選選	選 :		紅 :	園:	選	朗		宗 ::	選
0)	音 67	$\widehat{47} \ \widehat{46} \ \widehat{46}$	59	45	61	39	50	48	55	52	42

となつけむか」とある。

再度、奥洲下向。はるばる山里を越て水無月 再度、奥洲下向。はるばる山里を越て水無月 で、東洲下向。はるばる山里を越て水無月 で、東洲下向。はるばる山里を越て水無月

朝夕の露霜いとへ三百里 其 友 あれども一以下略一。そして あれども一以下略一。そして

ほか、当時、津軽では一流の。宗匠。 友 人から餞別の句をおくられ 「むらさきのゆかしき色にはるばるの海山 をこえ来しは水無月十日斗りなり、奥深き友 人の交り浅からず月も日もたちまち秋の名残 となり故さとへ帰るさの旅へ赴かんとして 梅檀の実よりも人のたのみあり

と詠んで帰った。

青森と大阪の距離は、鉄道によると千余キ 本海を渡って昔から、どんどん津軽へ入って 本海を渡って昔から、どんどん津軽へ入って 本海を渡って昔から、どんどん津軽へ入って を浦集」には、京、大阪の数々の宗匠の句が 付きれるし、三谷句仏宗匠はじめ、津軽の俳 見られるし、三谷句仏宗匠はじめ、津軽の俳 見られるし、三谷句仏宗匠はじめ、津軽の俳 見られるし、三谷句仏宗匠はじめ、津軽の俳 といる。 大阪を訪れている。 ないなの感を「なにわ会館」で一層深くした るかなの感を「なにわ会館」で一層深くした るかなの感を「なにわ会館」で一層深くした



中 々 選

草の実が夕陽をはたおみくじが二人の見おみくじが二人の見 脱いでからセミ狂わしき恋に生蝶になる虫と知ってて踏み潰す 日記帳私を裁くペンである 金持ちではない 里と同じ民話の観光地 葉なき人と語らう盆施餓 いでからセミ狂わしき恋に生き 人の口調を変えさせる と地主は子を躾け ぬ独楽のとまるとき 鬼 京都市 大阪市 都 11 倉 П 51. 求 芽 生. 祝勝会残念会が隣 会心の笑みライターが凜と燃え アレグロ 正信喝心の声をはりあげる 梅干がさすが主 おばはんと家内と妻に使い分け かけ 7 のままで終らぬ譜 地 蔵 0) 役 笑顔に会う日 の握り り合い 根で聞き分ける 80 面です 和 倉敷市 大阪 市

言

四紅督

葉は見事 促

0

電話

出前

あわてない

河

#

庸

佑

お茶漬が離縁話を聞い

てい

袋の卑しさ二次会三次会

意識して目を外らす意図は

か 1)

守口

野

呂

右

近

兼ね市

もどかしや背中の痒ゆい妻の留

守

九官鳥玄

関

に置き留守にする

小

幡

里

風

0

色飾

って見せる花時計 だろうと汗を拭き 客

席

の噂気にせず一人舞

じく程にとび

中

JII

雀

しげに耳寄せている夫へ読むさん似合いますかと独り言さん似合いますかと独り言きん似合いますかと独り言いないときもある耳の良さいがある。	み落として心ずか と 慢を話す酔い機嫌 僕の誕生日	総入歯していて女を食うつもり 対んでも独楽の限界知れたもの 対んでも独楽の限界知れたもの 平穏のシンボル朝の靴光る	多数決常識的なことになる 鼻の差の勝利へ婚期まで逸し 鼻の差の勝利へ婚期まで逸し を数決常識的なことになる を変われるままに秋 を変われる。 をなるを、 をなる。 をなる。 をなるをなる。 をなる	日影は誘えど深入り出来ぬ沼 母と娘の会話の外に父は居る 母と娘の会話の外に父は居る
堀	t,	屈	稻	野
江	ž	I	田	田
芳	Ī	E	进5元	素身
子	良	明	作	郎
霊峰のマナーを叱る石が翔び 下色の末路をぼかす輪転機 下色の末路をぼかす輪転機	しさい工士の書の言を表示しるく筋の白髪に負けぬ女の炎と母と子に云わぬ私の涙かな	省して寝ころぶ部屋に母匂うなる過去うしろめく事ばかいるまたひと彩が消えて秋からまたひと彩が消えて秋からまたひと彩が消えて秋からまたひと彩が消えて秋からまたひと彩が消えて秋からまたひと彩が消えて秋い	リハーサル無いから手術なお怖いりハーサル無いから手術なお怖い 場 市凡人は裏も表もおなじ顔 堺 市凡人は裏も表もおなじ顔	二人三脚いつとはなしに妻の笛 この先も泳ぎ切らねば老の海 この先も泳ぎ切らねば老の海 来子市
4	X .	高	大	八
3	E.	橋	道	木
构	П	タ	美乙女	千
志	Ĭ.	花	女	代

相談をすれば返事をせぬ財布 とどく金の星 かんなで風の音を聞き ふり向かぬおんなで風の音を聞き ふり向かぬおんなで風の音を聞き イン・一五黙禱にしむ蟬時雨 倉敷市 水 松 千 第	事	取 市 両 川 洋 洋	名をとらえ	青森市 工 藤 甲 吉
は反の米を田舎でよばれて来 歴代の社長がにらむ社長室 歴代の社長がにらむ社長室 歴代の社長がにらむ社長室	しゃぶりの旅路不安なレンタつけた芋青空の丘で食べりの旅路不安なレンとい鏡くもらす今日のぐち	格の不一致夫婦の婦ひた日々 教な女性ジョッキの呑みっぷ 現を知らぬ秒針だから好き むつかえる男の腕が太すぎる むつかえる男の腕が太すぎる	均寿命尻目に一つ歳を積み 対寿命尻目に一つ歳を積み が表示レビアップでまた映し の美技をテレビアップでまた映し が表示しては貯め過ぎきな臭い が表示している。 がある。 がなる。 がある。 がある。 がある。 がある。 がある。 がある。 がある。 がある。 がある。 がる。 がある。 がる。 がる。 がる。 がる。 がる。 がる。 がる。 が	東大阪市 市 場 没食子

東にあまえられると疲れなど忘れ 今日の時計はフルスピードで回った 握手しても信用していません 信用をしてても投げる牽制球 作原市 敬老の日もパチンコは勝たせない なにもかもうまくいってる忙しさ	八尾市 対数のしじま闘う肚と肚 が動物を は神の女は昼の風呂へゆく 出陣の女は昼の風呂へゆく 虚しさの数れんこんは穴を抱き ない呑みの清水らしき口あたり がい呑みの清水らしき口あたり	流でなく水虫が下駄穿かせ 解の嘘を呑みこむのど仏 北の酒を甜めつつ虫を聞く 溜りありそう白い杖の勘	長期療法遮断機下りたままの甥眉キリリ母の姿勢も新学期
小、	柳高	月	
島	楽 杉	原	
蘭	館 鬼	育	
幸	丸遊	明	
しきたりを反撥しつつもきいている 目記帳秘めごとうれしく少しふれ 根気よく今日も網張る蜘蛛である 機気よく今日も網張る蜘蛛である 大阪市 炎えもせず消さず暖めて来たふたり 変えもせず消さず暖めて来たふたり なにごとも暦で決める親ゆずり	病気には勝てずワンマン弱気出す 時計止っても時間は止まらない 朝顔の咲き甲斐がない朝寝坊 控え目な所作で野心を蓄めている ロターン出来ぬ明日への道を行く 神戸市 野菊一輪小さな部屋を秋にする 水引草小さな赤を主張する	大阪市 大阪市 大阪市 大阪市 大阪市 大阪市 大阪市 大阪市	頂上に立てば翼が生えてくる 丸木橋渡るリズムとなっている 強さ
本	Щ	金	奥
問	П	井	谷
満津	美	文	32.

寡婦の血が乱れる秋のセレナーデー目の命引き裂き蟬の声の音が出れる秋のセレナーデー目の命引き裂き蟬の声をはならぬ五十路の恋くすむが、	鳥取県 林 露 杖 六十の情熱退会届出す ・	の峰 竹原市 山 内 静	寝化粧の知識も入れて新世帯 鳥取県 冷 木 寸風子遊びにも飽いて結婚するという 一人住む女 冷たい鍵を持つ 一人住む女 冷たい鍵を持つ よく動く駒で王にはなりきれず 海南市 牛 尾 絹 核	
逆境に振り廻わされて来た強味逆境に振り廻わされて来た強味一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で一様で<l< td=""><td>荒浪にプールの自信砕かれる 和歌山市 若 宮 武 雄札束の方へ傾く影法師 和歌山市 若 宮 武 雄札東の方へ傾く影法師</td><td>道を歩くと廻鏡を歩くと廻鏡</td><td>青い鳥詰司陶の中に居た</td><td>の玉だよ池の錦鯉</td></l<>	荒浪にプールの自信砕かれる 和歌山市 若 宮 武 雄札束の方へ傾く影法師 和歌山市 若 宮 武 雄札東の方へ傾く影法師	道を歩くと廻鏡を歩くと廻鏡	青い鳥詰司陶の中に居た	の玉だよ池の錦鯉

海荒れて祈る外なし漁夫の妻 生命線が少し縮んだ事故に会い 白でない証拠のような黙秘権 負けて勝つことにも疲れ共白髪 決断へ秒針静かに時刻む 長針を戻してみても明日は来る 長針を戻してみても明日は来る	の絵の中で男は武者震いの絵の中で男は武者震いの絵の中に金剛山を披露れりの絵の中で男は武者震いを読む峰の高さにある聖を読む峰の高さにある聖	者でも馬鹿でもなくてよりがのようにほほえ	美意識の異なる数で恋生まれ その風に合して今日の雲流る 上向いて歩こう悔いのない小径 大阪市
藤 時	安平	板	西
井 末	次	尾	出
明	弘	岳	英
朗 灯	道	人	子
家雨にも定刻通り霊柩車 家雨にも定刻通り霊柩車 家雨にも定刻通り霊柩車	法を広げて軍備もちたがり 大の差を隠忍の幅で知り 大やと死ねるが言える歳を積む なと死ねるが言える歳を積む なと死ねるが言える歳を積む なと死ねるが言える歳を積む	用もよし雪よし夕映が更によし 新装の店新装の匂いする でよし雪よし夕映が更によし が要によし	止り木を探すおんなは紅落す 個社後退長生きも黄信号 にり木を探すおんなは紅落す がわる世に合わせて老いの道があき
も定刻通り霊柩車 も定刻通り霊柩車 を対していたすらに詫びている。 を対していたすらに詫びている。 を対していたする立話。 がよびではいた残暑の字がたいに書いた残暑の字がたいに書いた残暑の字がたいです。	大きなげて軍備もちたがり 東図に三種の神器書いてある 来図に三種の神器書いてある 来図に三種の神器書いてある 鳥	しとど塔は王朝の色に映え もよし雪よし夕映が更によし を必に新装の匂いする を の無い浮御堂でよし月冴える	り木を探すおんなは紅落す季の花わびしくゆれる無人祉後退長生きも黄信号
はのような謝辞きく九十の死に書いた残暑の字がとぼけいに書いた残暑の字がとぼけら只ひたすらに詫びておくら只ひたすら立話がでおくなける立話がでいまする立話が出まる立話を対けるである。 したのような謝辞きく九十の死	法を広げて軍備もちたがり 大ヤンの甘さ知ってる孫の知恵 東図に三種の神器書いてある 東京 東京 東京 東京 東京 東京 東京 東京 東京 東京	をど塔は王朝の色に映え もよし雪よし夕映が更によし を必に新装の匂いする をあた新装の匂いする	り木を探すおんなは紅落す 季の花わびしくゆれる無人駅 を探すおんなは紅落す かる世に合わせて老いの道があき
に書いた残暑の字がとぼけいに書いた残暑の字がとぼけいに書いた残暑の字がとぼけら只ひたすらに詫びておくら只ひたすら立話がでおくなける立話がでいまする立話ではまる立話ではまる立話ではまる立話では、 大阪市 津	大を送を広げて軍備もちたがり 東図に三種の神器書いてある 東図に三種の神器書いてある 鳥取市 河 なと死ねるが言える歳を積む なと死ねるが言える歳を積む	をど塔は王朝の色に映え もよし雪よし夕映が更によし の無い浮御堂でよし月冴える	り木を探すおんなは紅落す 季の花わびしくゆれる無人駅 を探すおんなは紅落す

一番人の柏手扉開きそう をして甘さは見せぬ怒り肩 だ波に環境破壊怒り聞く ご馳走は隣りとわかる鼻をもち 自己主張するよう小川溢れたり を放布	それぞれのポーズが似合う朝の駅終日記に書く一泊の旅に出るでパートで四季の流れを嗅いで来るを明めい気持ちで銀婚旅に出る	存外の儲けは古稀のテープ切り 初孫へ俺似私似もめている 功成りし樒の数の中で逝き 神戸市	だかいり	美しく老いたい女読書するオクターブ声高になる露天風呂しわよせが趣味の火消しにやってくる
田小	柏	仲	宫	
垣 西	山	レ	П	
方 雄	五	どんたく	笛	
大々	助	ζ	生	
白足袋をはい白足袋をはいったりでは、	生きている が温れに 変のに	ける 増量のとすじ が表現 が表現 が表現 がお庭	莫迦にされ の要る話 まれ	距離 おけば 水平線ぐっ
と	でいる証拠酒屋につけがある の夏の終りをつげる白 の夏の終りをつげる白 でいる証拠酒屋につけがある	が が が は が が が の お庭は季節に逆らわず の を は がり の を は が の を 根ばかり の を は の を は の に が の に が の に が の に が の に が の に に に の に の に の に の に の に の に の に る に に る に に る に 。 に 。 に 。 に る に 。 。	そうで撰る難解語 だまだ自信のある騒 で頼みにくい筆	ばライバルすーとはいり込みっと睨んで社長です
ね沢価京をている。	が夫の方	に に は な な に 逆 ら わず が り に 海 は 形 に 海 は 形 に あ に あ ら れ で に あ に の に に に に に に に に に に に に に	市	ライバルすーとはいと睨んで社長です
は は は は は は は は は な ら ず も に に の 秋 る る る る る る る る る る る る る	がある 西宮市	れてい 奈良県	带 F	ライバルすーとはいり込みと睨んで社長です
ねばならず 福原市 岩	大 行つ 藤 西宮市 藤	れてい 奈良県	节 阿 萬	ライバルすーとはいり込みと睨んで社長です

で で で で で で で で で で で で で で で で で で で	売る喧嘩買って老骨きしませる 感情を押え時代の波に乗り 感情を押え時代の波に乗り	八畳が最後の私の城となる 何もかも赦す気となり闘病記 何もかも赦す気となり闘病記 和歌山市	きざむリズムへ妻の老いを聴くけ猿の未だ逃げてゆく森があるけ猿の未だ逃げてゆく森がある鱗の跳ねない海へ漁夫の咳	漁網張る如く看板立ち並び
岩	中福	津	小	
田	村田	H	林	
美	ゆ き を 路	与	孤	
代	を 路	史	_	
亡き母の分まで義母へ尽し 大将がごろごろしてる縄の 大将がごろごろしてる縄の 計画が綿密であり出来心 神山の恩を無視して嫁くと とっつきは悪いが力量だけ とっつきは悪いが力量だけ	週忌寂しさどっとわいて ちょばっかり次々妻の死れにするか遺影の写真へれにするか遺影の写真へれにするが遺影の写真へ ま 死 去	背のひくい男が肩を張って見庖丁の切れ味明日へ的しぼる死火山となる運命をやがて抱	坐禅組む足へむくむく湧く疑 板前が挨拶に出る今日の客 を肩を肩寄せくらす吹き溜り	
困り まあばきたて をしたい 大田市 大田市 大田市	さくる ・ ・ ・ と ・ は き 間 市	で見る 柳井市	疑り 急 再 市	米子市
ばは云 れこた	くえ迷へ	柳るく手	呉 問 車 市	米子市 石
ばは云 れこだいきたい 大田市	くえ 迷い 抜き	柳るく手井市	呉 問 車 市	
ばは云いれんがいた田市藤	を	柳ある〈手井市弘、	県間 市 林 野	石

岡山市	妻去んだままで下宿の花が枯れ	白黒のテレビを据えて世にすねる	扇風機親子の風がまじらない	夕やけの返り血浴びて子が帰る	兵庫県	冷夏異変省エネ天に通じたか	病みあがり空の青さよありがとう	各停の様な定退後の生活	ロターン又も都会が恋しなり	大阪市	岐れ道ばかり男歩かされ	とろとろと残り火燃やす夫婦愛	生きる汗ひとり離れてゆく蟻よ	たまさかの昼寝妻に見る疲れ	大阪市	貧しさに慣れて漬物石軽い	順調をあえて好まぬ風雲児	うしろ指慣れて振り向きなどしない	虫干しに亡母が愛した柄があり	松江市	間違い電話またかと出れば社長から	することが無いから金魚飾るのみ	切り札を握っているから慌てない	買おうにも無い本貸したままになり	島根県
Щ					遠					欄					江					梅					小
端					Щ										城					本					砂
柳					可										修					登美					白
子					住					蘭					史					天也					汀
のんびりと留守番がよい敬老日	大阪市	手術待ちうつむき加減の姿勢にて	垢つけて風呂の許可を待っている	医学を信じ切腹するときめ	油蟬に非難されつつ点滴し	大阪市	一生を刺身のツマで甘んじる	ぜいたくを追うから物価高こたえ	年寄りとして大正がもてる酒	毛虫取る一々鳥肌立て乍ら	大阪市	ふしくれた掌が愚痴などを口にせず	一冊の本を読み切るのも秋か	虫の音も悲しきものよ米不作	田んぼへも行くのが怖い米不作	今治市	脳味噌をゲートボールにテストされ	確固たる天職があり余技光る	父今朝も残り少くない髪揃え	息切れを鍬に休めて秋を打つ	出雲市	とり敢えず彼女と母を逢わせとき	目玉焼仲よく片目宛で足り	夏まつり虫の命をたんと売り	歌好きの人にボリューム上げる虫
	西					天					室					越					原				
	森					Œ					谷					智									
	花					千					徹					_					独				

所詮手の届かぬ人の美しいじっと目をこらせば月に佇つ女奈良県	れて添うたに早やもう別れ	背伸びしすぎて足をすくわれ惚れているから言葉がつかえ	パパくくと二号の鼻声	心から笑える日までの共稼ぎ	美しい汗が沁み込む菜っ葉服勝負餌の担く縁起は噴れれず	そぼそと暮して親子に	倉敷市	花のない庭へなにしに残り蝶	有難い冷夏へ野菜値を案じ	引越しで捨てたを今更後悔し	新築の当座は掃除苦にならず	西宮市	若がえることの一つの口づけか	冷酷な耳を姑がもっている	人も脇役	本心を言わぬ対話が乾いてる		伊藤律米穀手帖忘れとり	職安で引導うけてる定退者	良慶さんの年まで辛抱せにゃならぬ	
上			Ī	直			藤					島					西				
H			Ţ	京			井					居					村				
72				七			春					白					早				
光				面山			日					宗					苗				
明日あるを信じ床につくけれど金賭けて走らされてると知らぬ馬叱っても平気な顔の子憎くなる			人好しの眉目みつめて	亡中関見い出す段で均築・米子市	敬老会へ亡母の姿をおいてみる日めくりの格言が痛い二日酔	音のする銭だけ残り義理果たす	持て余す系図土蔵は雨が漏り	岡山県	玉乗りの少女は神を信じてる	じっとりと汗が流れる運命線	白波に揺れる孤独な蟹の泡	手花火の父のまわりに絆の輪	八尾市	米英仏中ソもこなす日本の胃	正確な数字にトリック隠してる	一線を引くと対抗意識出し	綱引きに力を入れぬ奴が居り	藤井寺市	どうあがいても所詮蔵なり	いやと云う程身につまされるのも歳か	
	竹			林				出					香					中		13.	
	中							原					Ш					原			
	綾			瑞				敬					酔					比呂			

々

枝

珠

伝統の手織辿れば母の知恵 故郷の膳嫁割箸という孤独 お手本にしたくないよな老に逢う ほころびを綺麗に繕う母の針 ほころびを綺麗に繕う母の針 岸和田市 常しかった夏へ見舞の礼を欠き 常しかった夏へ見舞の礼を欠き	約束の明日へ秒針待ち切れずむつ湾の蒼さのようなお人柄むつ湾の蒼さのようなお人柄ないらぬ 工藤甲吉様ようこそ (二句)	社長から声がかかったかくし芸 芸のない男で人を裏切らず 芸のない男で人を裏切らず	を が が は で います が を の 重荷はまだ取れず が になりたくないわとかわされる が は が はまだ取れず の ま で います も の も の に な の も の も の も に も の ら る ら の ら の る の る の る の る の る の る の る の る の る の る の る の る の る の る の る の る の る の る の の る の ら る の る の る の る の る の る の る の る の る の る の る の る る る る る る る る る る る る る	優しい言葉欲しくて泣いた幼い日
清浦		松	植	宫
野野		原	村	尾
こ 和	!	寿	客 遊子	あい
う 子		子	子	き
産業参する四季を産業参する四季を	に代独強	井戸がしまして	ほふ割人生ほこのを	一言が
魔よりも若かった親の墓渋う中流のくらしに秋刀魚高くなり中流のくらしに秋刀魚高くなり中流のくらしに秋刀魚高くなり養理でした握手で同時に手をはなし養理でした握手で同時に手をはなし島点にかえり静かな水鏡島はにかえり静かな水鏡島根県かの音から冷える秋の窓島根界を好んだ亡夫の花	女枯れない女枯れない	茶碗おいしい朝のお茶となり びよる秋へ芒の穂が笑う がよる秋へ芒の穂が笑う	ところのゆとりくすぐる秋の彩 ところのゆとりくすぐる秋の彩 ところのゆとりくすぐる秋の彩	が道づれとなる一人旅大阪市
秋水哺 時 魚高くなど 時に手をなる が 表 が えん とが 老 が えん とが 老 が えん	女枯れない花を抱く母は命の愛を抱く	とい朝のお茶と へ芒の穂が笑う へだの穂が笑う		大阪市 神
(本) (本) (本) (本) (本) (本) (本) (本) (本) (本)	安枯れない花を抱く母は命の愛を抱く母は命の愛を抱く母は命の愛を抱く	とい朝のお茶となり しい朝のお茶となり となり となり	島根県	大阪市
秋の窓株の窓本端はましはなし島根県はなし	要にもなって子を守りとんぼ茜の愛を抱く とんぼ茜の愛を抱く とれば の愛を抱く	を くきかす虫しぐれ へ芒の穂が笑う へだの穂が笑う	島根県柳	大阪市 神夏

、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、	を 生真面目な歩巾でいつも負けている 生真面目な歩巾でいつも負けている 実う日とめぐり逢いたい鶴を折る にばれ花まだ終わらない煩悩よ	働く事好きで私も日本人 一部のは、一部のでは、一部のでは、一部のでは、一部のでは、一部のでは、一部のでは、一部のでは、一部のでは、一部のでは、一部のでは、一部のでは、一部のでは、一部のでは、一部のでは、	迷信と笑って済ますのも若さ 無理やりに悩みを聞けば金の事 無理やりに悩みを聞けば金の事 東大阪市	高原に風を走らす芒の穂 浮浪児に行くあての無い寺の鐘 浮浪児に行くあての無い寺の鐘 平田市
河	西西	内	萩	久
原	t	芝	尾	家
み は る		としよ	真佐志	代仕男
所がでました。 一番を頼めば汚ない札をくれ 種固者死ねば遺族の語り草 押しかけるつもりか女荷を運ぶ 神しかけるつもりか女荷を運ぶ 倉吉市	草を抜くにも老人手を合間の思い上りがまねく事間の思い上りがまねく事	部署を割るにも見せるお人柄 権力のシンボル無言の天守閣 を割るにも見せるお人柄	敬老の日不孝を詫びる父母もなし 六十路いま確かに踏んだ富士の土 六十路いま確かに踏んだ富士の土	長生きをすればするほど死にともな 山売って左り前かと噂され 山売って左り前かと噂され
渡	西	藤	金	柳
辺	JII	田	Ш	原
菩	善	頂	満	静
句	紫	留子	春	香

間と云う 世話を遺	老いの危篤一族集め持ち直す 老衰のどっこい正常脈つづく 祖母逝去 枚方市 宮 川 珠 笑	買うチャンス今だとせかすコマーシャルほとけの眼心のしみが消えてゆく決断をしたら青空見えはじめふと見れば爪が伸びてた日曜日	うて気楽で	末っ子の夫婦は親を振り廻し 京都市 山 本 規不風 黙ってる辛さを心で詫びている	無理しても顔には出さぬ太っ腹道草で心を晴らす倦怠期 河内長野市 井 上 喜 酔	e d
道と云う道曲ってを置き去りUターを置き去りUター	は尾花系えて一本秋を出し あの笛で踊った過去が語りかけ 歳月に溶けて夫婦の愛結ぶ 島根県 大 森 孝 華	水溜り波紋小さく消えてゆく 片ちびの靴に一人の道が待つ 何色に終着駅を塗ろうかな 竹原市 時 広 一 路	痛む膝負けてはならぬ意地をもち放牧の牛も見えない山の雨真っ直ぐに立ってる稲穂にある憂い	表では、大阪市・北 勝 美恵まれぬスタート重荷負いつづけ 網棚へ心を半分置く夜行 おい日に鞭打ち足らず老いて打ち	柏手の中で凡人考える 大阪市 横 地 雅 風やかされて生きる心の朝ぼらけひとすじに生きる廊下の拭き掃除	天理教修養科入学 天理市 羽 原 静 歩風だより女が今もひとりとか

岸和田市 桑 原	情報源持った素振りで口つむぐ	買いもせぬ手で商品の列乱し	謝りに行けば仮面を付けて出る	岡山県 岩 道	仮免許ついそこまでが案じられ	どんな部屋案内するか長廊下	道しるべここから八丁坂になり	島根県太田	褄とれば蛇の目が似合う先斗町	麦を踏む夫婦の足にあるリズム	足組んで吸うて漫画になる女	高槻市 若 柳	することが有ってと余生羨まれ	虫干しも亡き老妻偲ぶものばかり	掬われるために生まれて来た金魚	生駒市 草 深	モターへとしそうな伝票サッと取る	リフォームを溜めて定年待ち遠し	呑みなおす廊下名月ほめている	寝屋川市 柴 田	うまかった味を舌が忘れかね	隠れん坊した樹も街となり切られ	風呂の孫十がやっとで茹であがり	出雲市 板 垣
												1010												
道				博				亀				潮				酔				英壬				夢
夫				友				甲				花				升				子				酔
自由自由と平和の世が乱れ	鳥取県	い切りの悪	年金に盆だ祭りだ羽が生え	七十年我が人生の一絵巻	貝塚市	針穴へ老眼鏡をまた探がす	いつか来る墓地だ雑草抜きに行く	記憶力自慢の妻の読書好き	奈良市	落武者の夢も流れて千曲川	割り勘で別れた空に流れ星	台風が政治の合い間縫うて過ぎ	兵庫県	鰯雲串ざしにしてジェット雲	ふる里は良きものだった晴れの旅	慣れと云う手許狂った日の焦り	和泉市	ナース今日札所巡りという意外	命とも頼む主治医が同病で	神様の返事待ってる車椅子	和歌山市	ライターで焼くとものみな生臭し	台所酢よりさびしきものを踏む	池よりも立板古びゆく晩夏
	森				行				森				大				西				垂			
	田				天				田				江				岡				井			
	布				千				カズ				秋				洛				千事			
	堂				代				テエ				月				酔				寿子			

堪えて	人柄に泣き人柄に励まされ	島根県	安売りの看板下手なほど安く見え	妻の座があって俺の座見あたらず	二DK妻子の留守は広く見え	諫早市	丁寧な言葉であっさり断られ	病んでこそ妻の忠告身にこたえ	婦人会親馬鹿らしい子の自慢	七尾市	雨降りを手でたしかめて落ちつかず	ポケットの小銭をそっくり貯金箱	ジョギングとうとう母もかり出され	京都府	来客に素直で賢い妻でいる	ずるい奴泣くことおぼえた孫の智慧	膝に居て孫の勤行数珠を嘗め	綾瀬市	ばあさんを紅一点とよろこばせ	清く正しくだけでは渡れぬ世	ジョギングの汗朝風呂で流す幸	仙台市	託児所に任せて稼ぐ赤い爪	石工は他人の墓石ばかり彫り
		大				原				松				間				大				Ш		
		野				Ш				高				嶋				Щ				村		
		酔				明				秀				青丹				٢				映		
		夢				春				峰				子				金				輝		
も離	待たせてるあせりへ運ぶ歩の乱れ	気が付けば踊っていたのは僕ひとり	鳥取県	だし昆布役目果たしてふくらまり	日帰りの旅には惜しい湯があふれ	五線譜のどうあれ父の歌はずむ	鳥取市	よろい戸の隙から風も蚊も這入る	瑞雲は華燭の典へ盛りあがり	お百姓けらに足裏くすぐられ	下関市	医師に聞く妻の病いの名が怖い	お人好し笑って妻もお人好し	同じ柄でも姉さんは美しい	三重県	年甲斐がなくても妻の紅襷	板挾み自問自答の日が続く	冗談が本当になった役廻り	青森但是	マンションへお国言葉を運ぶ母	三面鏡の角度で好きな顔を選る	人前は亭主関白許される	富田林市	太陽を両手に掬うビルの底
			Щ				小				国				坪				五十				中	
			崎				林				弘				田				嵐				村	
			秋				由多				半休				冬				操					
			女				多香				門				花				史				優	

和服着た棋士のせわしいスケジュール 一大 内 紫 錆 ボっつりと切れた絆は細るのみ 町田市 竹 内 紫 錆 下心あるから少し胃が痛む	九峠を除けれ	られるか	日照がたたって菊の芽ままならず 一	市 平 I 田 I 実	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
明日香路の路傍の石の語る詩で、一ゲンを漁って五十の若造りが一ゲンを漁って五十の若造りま大阪市を信じて見合い写真とる東大阪市の大阪市の戦取線香に蚊がとまり	の旅値切るひまなく毛蟹買うの旅値切るひまなく毛蟹買う	ぶぐ 趣味の会 齢になり 単和田市	断末苦尾ビレ震わす活作りとあせた散らぬ造花でまだ挿され色あせた散らぬ造花でまだ挿され	. · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	江 市
奥	神	原	#	: 辻	竹
吅	田	さ	Ŧ	1	内
弥 山	秀	よ	柳五		寿
~	山夆	子	自		美

抱き寄せる水は却って逃げてゆく 冷厳な事実となった悔い拾う 羽咋市	ひとつずつ彩消えてゆく老いの坂植木屋の鋏が冴えて祭待つ自販機がまだ酔いたいのを誘い資和田市	虫干しへ夫婦の和服揺れている 人間気儘やっぱり暑さがほしい夏 迎え火を焚けば亡夫に出逢えそう 鳥取市	ほどほどに聞いて縁談まとまらず思い出は異国の丘に祈るのみ枚方市	一応は蔵も建てたが中はから 大学へ行かず定年ない仕事 生きてれば母は百かとなつかしみ 倉敷市	へそくりで買った夏服着ずじまい仮縫いのセピアが秋を浮き立てる外泊は子より夫が淋しがり 松原市
桑三	古	有	稲	斎	北
田 宅	野	田	葉	藤	野
静ろ	ひ	٤	星	通	久
子 亭	· で	江	4	風	子
引き返すきびすは持たぬお人好し童心かえる喜寿の重い腰を温めるかつてない冷夏に腰を温めるないたといいない。	する上へマンガが乗ている足場で大工唄訳をせずに黙ってい	さわぐ日もあいた世もあ	世成と云う名で山菜潰される 世ターンして過疎を埋め嫁も来る はの五感母なる川へためらわず	(五) (1) (1) (1) (2) (2) (2) (2) (2) (2) (2) (2) (2) (2	一匹は抱かれて小犬の散歩かなTシャツのお下り少し若返り天も地も裂けよと哭いた遠い坂
		क्त	1/1	त्ते	111
	伊	市	黒	市増	狭
	伊藤				
	100	清	黒	増	狭

羅漢群像	
	正
	本水
	客
未来主	

石永 石 仏劫 漢 の余りに 0 0 0 耐 独 呟き苔 り言 えが羅漢 稚く祈 に耳 深沈として闇 0 1) 眼 せ に宿 E 似 る 1+

色々と鏡

の方も気をつ

6

帽終着駅も見えてくる

若

本

震えてる指を乳房も知ってい

3

親

類

0)

#

世

頭 緒

が寄

0 10

てこず

Ħ.

思っ

てず

菊

沢

小 松

袁

水の恥思 Va ^ おも 起こせば恐れ入り む ろに背を伸

旅敬

羅

漢

群

像なに訴えて眉を寄

吉報を告げる男がまた吃り 本人も病名を知る癌であり

電気カミソリで剃ったとわ

か

3

U

げ 0 跡 浜

久米 雄

塩 3 たき 2 けは値上 0 H i を P R りし して又値 ない 七不思 Ŀ け

戦争になっ

たら若者なに唄

5

<

議

老いてなおゴキブリ退治 1 1111 りだが敬老の H かい が面 嫌 V x 白

思 63 切るときに私 か 人 11 3

このままがあ 不景気が身近 あ あそうか 敬 りがたい かに 老の しせまり H か 席 なと思う が空き 秋

伸

びる日

と縮む日がある

鬼 た

0

角

Vi

力

h

だがが

_

の力は

-

だっ

本

恵

朗

西

尾

栞

に秘密を少う 3 Ĺ 良 中 13 月 話 夜 寸

心一 夜 0 to 女

薫

橘

高

風

仏問

診

底

の石

が流

11

う

すんでよ

か

0

たとは

他人

の夜の 法僧のその伝説をきく 60 仲と言 笛 にあわ われてみたい せた詩

落武

(沙華危篤の人へ急ぐ旅)者の強さ髻切れてから

の温

みも秋の暮となる

い風

渡

る変

0

伝

to

1)

ゆくさま

つまでも背もたれのない僕

0

椅子

5

退

0

汐

時

つかんで惜しまれ

火薬庫に異常なしまだ戦えるぞ 消火器も備えて木の香新し

111

村

好

郎

川柳太平記(30)

二世川柳と桃井庵和笛

東野大八

名不明)の死をもって絶家している。家そのものも、孝達の実子(川柳とは無縁・世代は三世孝達をもって消滅しており、柄井世代は三世孝達をもって消滅しており、柄井田村、石衛門の衣鉢を継ぐ川柳世襲の

記載によるものを参考とした。 載された龍宝寺縁起と題する柄井家過去帖の これは大正十年刊の「川柳きやり」誌に連

に被災し、再製したものとの話もある。第一、に被災し、再製したものとの話もある。第一、に被災し、再製したものとが話した柳祖柄に被災し、再製したものとが記帖と考えられるわけだから柄井家の家系すべてのものとはいえないようだ。さらにこの過去帖は関東大震災ないようだ。さらにこの過去帖は関東大震災ないようだ。さらにこの過去帖は関東大震災ないようだ。さらにこの過去帖は関東大震災ないようだ。さらにこの過去帖は見りない。

でて話を本筋に戻し二世川柳に触れよう。 は「契寿院川柳勇緑信士」とあるのに対し、 は「契寿院川柳勇緑信士」とあるのに対し、 が異っている。(緑は緑亭のもじり?)

を襲名している。八右衛門世襲は三代目に当

柳多留35篇の序文にこう記す。 二年(一八○六)である。同年編さんの誹風 川柳の没後十五年目で、時に四十八歳。文化 日本には、初代

を知るべき……云々」(小石川連琴我述) た生も句には手の有、眠柳居士も豈此樽の底先生も句には手の有、眠柳居士も豈此樽の底先生も句には手の有、眠柳居士も豊此樽の底のされ句十会を催し、其句々を抜粋して三

この川柳二世立机までの、初世川柳没後の

川柳の名蹟を失うことをおそれ、寛政六年秋行を御破算にするのも惜しく、かつまた初代行を御破算にするのも惜しく、かつまた初代できない。板元の花久はさりとて柳多留の板できない。板元の花久はさりとて柳多留の板できない。板元の花久はさりとて柳珍はどのような推移をたどったのか。

に、三年ぶりに多留二十五篇を板行した。

「年々歳々の華相似たり、尽きせぬ水の言、年々歳々の華相似たり、尽きせぬ水の言、柳の老木枯果てて、此道既に絶えなひ、是絶えたるを継ぎ、すたれたるを興す、ひ、是絶えたるを継ぎ、すたれたるを興す、ひ、是絶えたるを継ぎ、すたれたるを興す、とに行て灯にあえるが如く、欲喜の美諷々々に往行て灯にあえるが如く、欲喜の美諷々々とはなしぬ。市中庵主述」とはなしぬ。市中庵主述」

と扇朝が述べ、また跋文には子誠が

「市中庵の旧友笛老人の撰紙をあつめ、家「市中庵の旧友笛老人の撰紙をあつめ、家

その第一は二十六篇以後から、集録の句に はすべて表徳をつけること。そして二十八篇 はすべて表徳をつけること。 そして二十八篇

に四十二句をとり入れた。そしてその巻末に はたかの地の連句の編をむすびとな すことを……」 かくて同誌に「羽州山形連会」の題目の下 かくて同誌に「羽州山形連会」の題目の下

再編に追々諸州の点句を著さんことを思

給うことを願う」

と付記して、地方の句も送ってくれれば樽に

さて、和笛を柳樽の仮点者として担ぎ出したの呼びかけも徒労に終り、山形連会以外のこの呼びかけも徒労に終り、山形連会以外の上載せられているが、柳樽に地方連の句が若年後の文政十一年に、飛驒の高山連の句が若生はいという意向を示している。しかし、地方地では、地方連会では山形と飛驒のみ。

た花久だが、和笛は何さま七十台という老齢である。結局、和笛は樽五冊を手がけただけである。結局、和笛は樽五冊を手がけただけである。二世川柳の立机は、この追善句合れている。二世川柳の立机は、この追善句合れている。二世川柳の立机は、この追善句合が、和笛追善句会が盛大に催さび、各団体連合の和笛追善句合が盛大に催さび、各団体連合の和は、この追答句合いた年に当る。花久はじめ川柳派一門の行われた年に当る。花久はじめ川柳派一門の行われた年に当る。花久はじめ川柳派一門の行われた年に当る。花久はじめ川柳派一門の大きない。

板元は花久というのが常識である。それがなり集」は初代川柳の撰句なのだが、それなら句集」は初代川柳の撰句なのだが、それなら句集」は初代川柳の撰句なのだが、それならの集」は初代川柳の撰句なのだが、それなら

た。

っていたとも考えられる

している。ともあれ花久は、この前句集三篇をである。ともあれ花久は、この前句集三篇をである。ともあれ花久は、この前句集三篇を

程経て和笛は死んだ。この老点者亡きあとて、柳樽も牛耳っていく実力者として登場して、柳樽も牛耳っていく実力者として登場したのが文日堂礫川である。記録上、彼は和笛たのが文日堂礫川である。記録上、彼は和笛に川柳二世、三世を陰から引回すほどのキレに川柳二世、三世を陰から引回すほどのキレに川柳二世、三世を陰から引回すほどのキレに川柳二世、三世を陰から引回すほどのキレに川柳二世、三世を陰から引回すほどのキレに川柳二世、三世を陰から引回すほどのキレに川の文日堂は、いにしえの川やなぎの正流にして、今の柳と枝川とえの川やなぎの正流にして、今の柳と枝川とえの川やなぎの正流にして、今の柳と枝川とえてむつみ深し……云々」

本にもあまる茂りや夏木立 礫川 世の中の恵みをうけつ返り花 川柳 世の中の恵みをうけつ返り花 川柳 は二世川柳と肩を並べて軸吟を詠んで はに「川柳風」を呼称し、樽三十二篇では、 「川柳風連会角力」といい、同三十三篇では、 「川柳風連会角力」といい、同三十三篇では、



誹

12

柳

97

CIP CIP

#

3

篇

研究

室

Ш

木

迷 博

朗美柳

鈴

木木江

黄

・故岡

田内

甫

敬

紀 西

恒

勇

原

亮

| (三丁) |

ながれのすへのちうや出る柳原

563

室山=「(浅草の)柳原は昼は質流れの古着室山=「(浅草の)柳原は昼は質流れの形に変していかさい。 東での万年新造が二十四文で切身を売っての果ての万年新造が二十四文で切身を売っての果ての方年新造が二十四文で切身を売っての果ての方年新造が二十四文で切身を売って入れて、後草の)柳原は昼は質流れの古着

柳原よるもばくものうる所

入江=賛。柳原は神田川に沿う堤で、柳を植五・18

昼見世も夜見世も安い柳原

明匹天2

岡田=同。

56 気のわるさ後家けしからぬふとり様

室山=まったく古川柳作家はおせっかいやき

「後家」なるものはいつまでも亡夫を偲んで痩せておらねばならず、むっちりと肉をつけて来たりするといけないものなのである。もっとも、作者も「気のわるさ」と語るに落ちているが……。後家の生態についてはすでちているが……。後家の生態についてはすでもでいるが……。後家の生か気のようない。

八木=賛。妊娠説もあるが、礎稿がいいと思います。

を生かすためにも。 西原=小生は妊娠と見たい。「けしからぬ」

岡田=小生は妊娠説はとらず、礎稿に賛。鈴木=西原氏説がピッタリと思います。

565 上下か一度にわれる鉢かつぎ

室山=『御伽草子』。鉢かづき』 姫。国司山蔭の三位中将の第四子、宰相殿御曹司の情を受の三位中将の第四子、宰相殿御曹司の情を受の三位中将の第四子、宰相殿御曹司の情を受の三位中将の第四子、宰相殿御曹司の情を受の三位中将の第四子、宰相殿御曹司の情を受の三位中将の第四子、宰相殿御曹司の情を受の三位中将の第四子、宰相殿御曹司の情を受った。 「いただき給ふ鉢、かっぱと前に落ちる時、「いただき給ふ鉢、かっぱと前に落ちる時、正確には上の鉢は少しく遅れるわけである。それよりかなり前の日に御れるわけである。それよりかなり前の日に御草ではるかである。

八木=賛。ちょっとバレ仕立 の浦の……久しく結ばれ」たのであるから。

青木二同

どう寝ても勝手のわるい鉢被ぎ

九九:105

岡田二替

のとやかさ空にくじらの声がする

室山=よい天気空に鯨が鳴いている 春風に空で武者絵がときの声

る。「空」と海の「くじら」とをむすびつけ たのが、この句のねらいであろう。 がった時にウナリを発するようにしたのであ ものを弦にした弓をその上につけて、高くあ なわち大凧には鯨の鬚や藤などを薄く剝いだ 年中行事』の頭註は「鯨の鬚の弓の唸」。す 例句第二句の「とき(鯨波)の声」の『川柳 四四 6

入江=賛

富貴天にあり鯨の初うなり

私の耳には「ウナリ」の音がよみがえる。 鈴木=賛。子供の頃の正月を想い出します。 五五:

岡田 三同

567 でんや野にあれと染らぬ口おしさ

視の句の一つ。紫宸殿や紫野にその名はあっ 室山=この謎の答、江戸の色「紫」。京都蔑 ても―といいたいのである

紫を見てハ京でもあきれべい

紫もけんくわも合ハぬ京の水

との自慢 入江=賛。「染かねて地名に残る紫野」(六一 ・8)。要するに江戸紫は、京都では染らぬ 拾九·27

そめものや此一ト品ハ江戸へやれ 6

西原=賛。『守貞漫稿』に、 清=岡田甫先生の雑誌が「江戸紫」。

鈴木=賛。京都蔑視の句の一つと言うけれど 言葉も江戸時代からである。東西の両雄とい 「江戸紫に京鹿子」「江戸紫に京紅」という 今世は京紫を賞せず、江戸紫を賞す

岡田二賛

568 てんやくと局ささやくおめでたさ

は御殿医者の略 入江=奥様ご懐妊のおめでたさ。「てんやく」

室山二賛

目出度さハやごとなき身に木綿帯

_ 16

八一.34

岡田二賛

569 一丁ハ俄にかわる傘屋

商人」が多かったところ。俄雨でたちまち傘 屋にかわる。本句よりすれば雪踏屋でも傘を 入江=照降町「小船町三丁目と小あみ町一丁 目のよこ通り也。雪踏屋と下駄屋軒を並る」 (江戸砂子・上)。ここは「両側軒並傘雪踏

売ったらしい。 降るばかりでも迷惑なからかさや

八木=越後屋の句と解していましたが……。 するが町江戸一チ番の傘や 天元・桜2 Τi.

かうてきな傘やの出来るにわかあめ

天五・智2

岡田川同 室山二同。 入江兄お考えすぎ。

紀內二越後屋説賛

同 吟 前月号から一 句

注文のスペースに合わせているのだが、 足らずでも通じるものは通じる筈である。 は思いきって句数を増やしてみた。しぜんそ る。僕も毎回三〇句くらいは選抜して、更に うだが、毎月の「秀句鑑賞」に掲載される句 れだけ鑑賞言が短かくなってしまったが、舌 数も、これだけだ、という数ではない筈であ 秀句がそう沢山ある筈がない、と言われそ 今回

優雅な入院百枚も絵が描けて

ゆっくりと味わってみたいものだ。 のベッド差の部屋に僕も一度入って、川柳を ないかも知れない。一日三、〇〇〇円くらい 死ぬ心配のない病人、いや本当の病院では

肩書きのない気安さの紙バッグ

構成のうまさを見習うべきであろう。 のない人物を配したところに成功がある。 紙バッグで庶民を匂わせて、その上肩書き

天国へ予約切符がまだとれず

目隠しへわなかも知れぬ手をひかれ

があって、裏の悲哀さを汲みとらせるものだ。 味の句には、ブスッと胸を突き刺す何ものか チラと洩らした老人の本音であろう。真実

借衣裳脱げば自前の汗が出る

と表現すべきであろうか。「自前の汗」がこ の句のいのちである。 緊張感に押えつけられていた汗は、 なに汗 花村

聞き馴れぬ訛りに犬が起きあがる

河

日

満

そ詠めるところである。 に更に味わい深いものが出てくる。 好奇心の強い人間に置き替えてみると、更 川柳でこ 可住

ちり紙にされぬ努力を忘れまい

ポイッではたまりませんものねー。 首相さえ使い捨てされる世の中だ。 不二田一三夫

ネクタイを少しゆるめて嘘をつく

中七をよく味わってみましょう。 きちっと締めているうちは紳士ですもの。 岩本雀踊子

稲の穂の軽さをなぶる秋の風

で、あますところがない。「中七」いいね。 こんな句が大好きな僕。今年の稲穂を詠ん 妻に似て俺に似てくる子のすべて

あがった、いい句である。 下五で今までの類想句を突っぱねて、跳ね

> かも知れぬ。これが人間の運命かも知れぬ。 人間とはみな、このような弱い心の持ち主

例えばの話急所へ近づける

まとまりがよくなった句だ。 本題はこれからぼつぼつ。着想のよさから

広島の空から消えぬきのこ雲

のできない句である。いついつまでも。 類想句があるかも知れないが、見過すこと

距離置いて見れば自画像漫画めき

る。下五は自嘲かも。 ない。いつまでもこの心でありたいものであ 余裕のある心で見れば、何事にも失敗は少

エンピツで書くのが似合う自叙伝で

素晴しい句にして、きびしい批判が恐い。 上五の「エンピツ」がぴしっと効いていて

飲め飲めと言うから飲めば嫌がられ

があることは確かですぞ。 馬鹿にして。でも飲む方にも嫌がられる原因 人間て本当に嫌ですねー。こんな正直者を

求芽

借りものの策で二の矢が放てない

なかったかしら。そこをつけ入られては、次 の句成功した。 の言葉に詰まるのは当然。中七から下五でこ 借りものでは、一の矢もひょろひょろでは

一水煙 抄一

秀句鑑賞

前月号から一

神 谷 凡九郎

う。そして降り止んだら空を見て、深呼吸でに負けず、止めと云わず降れと云えるのだろーは自分で落ちこぼれと云う。そんな人だから雨本当に幸せな人だと思う。そんな人だから雨本当に幸せな人だと思う。そんな人だから雨は降れどうせ俺らは落ちこぼれ は付ければります。

待つことの幸せじんと通夜のみち

もして虹を見たり、これからの道を見つける

のかも知れない。落ちこぼれ失格者万歳。

でく思った。でも待たされるのはやはり嫌い。 達はもう生きている事を喜ばなければとつく 言うことは、お互に生きているから出来るん 言うことは、お互に生きているから出来るん 出した。 "また今夜もやワ、多分』そんなこ 出した。が、いやそうやない待つと 出した。があるが、いやそうやない待つと 出した。があるがあるが、ことを思い 出した。があるが、いやそうやない待つと とを思い出した。が、いやそうやない待つと とを思い

は新しい心情が生まれて来るのかも。 といいい情が生まれて来るのかも知れない。 こく普通の時でもままある。 お互いに意識しない潜通の時でもままある。 お互いに意識しない潜流のでもままある。 お互いに意識しない潜にない。 ごく普のできますがあり、 そんな事があって、 夫婦にそんな時があり、 そんな事があって、 夫婦にそんな時があり、 そんな事があって、 大婦にそんな時がある。 決して

ゴキブリに云わせば私飼われてる

ますで、しゃろかナ、何とかせんとネ。とまでで、しゃろかナ、何とかけんとネって、害生きているから生命があるからと云って、害生のごキブリを飼う程台所は余裕があるはず虫のごキブリを飼う程台所は余裕があるはず虫のごキブリを飼う程台所は余裕があるはずまで、しゃろかナ、何とかせんとネ。

誰がためのいとなみ昏れて街はずむ

にかためのいとなみ。このもの。 を表裏とは云え、その間に何が介在するのだる表裏とは云え、その間に何が介在するのだる表裏とは云え、その間に何が介在するのだる表裏とは云え、その間に何が介在するのだっ。はずむ街の中には、その貴重な営みへの一瞬と源泉をすら託す人達が存在し、そこに流れ流れて往き、今日を消し明日への鋭こに流れ流れて往き、今日を消し明日への鋭い。はずむ街の中には、その貴重な営みとり、はずむ情にあると思う。昏れていると思う。昏れていると思う。昏れていると思う。昏れていると思う。昏れていると思う。昏れる情にあるとなった。

疑問であろう。

夫時々路傍で会った人のよう

拝啓と裸で書いたとも知らず

そんな失礼な手紙も多分あると思う。そして、得手してそんな手紙はど美辞麗句が満載て、得手してそんな手紙はど美辞麗句が満載て、得手してそんな手紙はど美辞麗句が満載て、おりと書き終えて手紙の主はホクソ笑んでったりと書き終えて手紙の主はホクソ笑んでったりと書き終えて手紙の主はホクソ笑んでったりと書き終えて手紙の主はホクソ笑んでったりと書き終えて手紙の主はホクソ笑んでったりと書き終えて手紙の主はホクソ笑んでったりと書き終えて手紙の主はからない。してやったがあると思う。そしていた。何故だろう、ホントに残念でする、でいた。何故だろう、ホントに残念でする。

王者たり子の絵日記のかぶと虫

子の満足感がハチキレている。よかったね。 それだけと云えばそうかも知れない。 然し は先ず少ない。 本のさし絵か、百貨店の売店は先ず少ない。 本のさし絵か、百貨店の売店は光す少ない。 本のさし絵か、百貨店の売店がと虫を山路雑草の中で見る事の出来る子供 ぶと虫を山路雑草の中で見る事の出来る子供 ぶとったりでした。

朝倉大柏



菊 沢 小 松 袁 選

屋上に登れば明日が見えそうで	病窓にも花火を見上げる窓がある	見舞花きれいな嘘も添えて来る		ささやかな仕合せ十指で握りしめ	尼寺は美声の読経で明けていく	数珠繰って一つひとつの罪を詫び	生きざまを覗いてみよう水鏡	貼り替えた襖に孫のどらえもん	名古屋市	鍵っ子が上手に目玉焼を焼き	泣けば買う親と知ってか泣き止まず	目をつむる事が恐いと父の老い	聞き上手話し上手の気に入られ	継母も実母も好きで子は悩み	西宮市
			辻						越						野
			は						村						呂
			10						枯						鵜
			む						梢						汀
もう元へ戻れぬ水にあるあせり	鳥取市	迫られてみたくて魂のおしゃれする	再会の掌のぬくもりにわかれえず	夢二つ三つあって女の貌でいる	生活のゆとりで遠い恋を追う	秋幾度重ねてもなお実にならず	大阪市	過激派へ走らなかったズック靴	罪意識しながら鳴らす花鋏	溺れても家族で打った杭がある	たそがれの帽子は鴉の好く彩に	回り道しても惑わぬ共稼ぎ	京都市	天井に幸せですとは書いてない	何もかも赦して青い空がある
	森						西						Ш		
	田						村						本		
	熊						芙佐						桐		
	生						女女						下		

新されて欺して今日も陽が沈む ないるがとの日の父の汗 がされて欺して今日も陽が沈む まされて欺して今日も陽が沈む まされて欺してかる天邪鬼	り添うて静かに聞こり添うて静かに聞これじわと首輪が締ま	大の溜息を不図見てしまい 人の溜息を不図見てしまい とがするででである。 というでである。 というでである。 というでである。 というでである。 というでは、 といるでは、 というでは、 というでは、 というでは、 というでは、 というでは、 というでは、 というでは、 というでは、 というでは、 というでは、 というでは、 というでは、 というでは、 というでは、 というでは、 というでは、 というでは、 というでも、 といると、 といると とっと。 とっと。 とっと。 とっと。 とっと。 とっと。 とっと。 とっ	号退気かしい	任がないからつき違う車窓きれたことに
Л	杉	倉	野	森
幸	千	芙	佳	葉
代	步	佐子	雲	士人
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	行浮気のなけて帰	革に今日の疲れを打ち明得など何にもないが側にやガーデン下界の事はまみませんを同時にいって	大さえも欲得ずくでワンという大さえも欲得ずくでワンという大さえも欲得ずくでワンというがなとなった柱撫で	大阪市 ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・
審も二癖もある年賀状 が思い出の人呼び戻す があって明日があって明日があ	具旅行浮気の虫にくすぐられ どほどにすればよかった二日酔 い汁吸ったばかりに世間の目	革に今日の疲れを打ち明ける 得など何にもないが側に居る およずがいでする。 おませんを同時にいって出る笑	大阪さくさに踏んづけといた意趣返ったさると欲得ずくでワンというさえも欲得ずくでワンというと生が互に顔出す床の中と生が互に顔出す床の中	皮ショー私に縁のないチラシ 脳を消す燈明にすきま風 を消す燈明にすきま風
審も二審もある年賀状 をうが思い出の人呼び戻す がある年賀状	員旅行浮気の虫にくすぐられ どほどにすればよかった二日酔 が計吸ったばかりに世間の目	革に今日の疲れを打ち明ける 得など何にもないが側に居る の疲れを打ち明ける はまずおいて みませんを同時にいって出る笑い	さくさに踏んづけといた意趣返しさくさに踏んづけといた意趣返しと生が互に顔出す床の中と生が互に顔出す床の中	皮ショー私に縁のないチラシ 脳を消す燈明にすきま風 を消す燈明にすきま風
中も二癖もある年賀状 兵庫県 市が道に日記があって明日があるわか雨甘い二人にしてくれる	具旅行浮気の虫にくすぐられ どほどにすればよかった二日酔 が計吸ったばかりに世間の目	革に今日の疲れを打ち明ける得など何にもないが側に居る得など何にもないが側に居る	さくさに踏んづけといた意趣返しさくさに踏んづけといた意趣返しさえも欲得ずくでワンというと生が互に顔出す床の中	皮ショー私に縁のないチラシ 脳を消す燈明にすきま風 魔好きすぎて敷居が高くなる

看去市		つけよう原潜通	妥協せぬわが子に己が姿を見	生と死と人瞬間の運に生き	唐津市 山	浮いて咲く蓮に沈んだ根の強さ	灯台へ夜を預けて島眠る	逞しく育つ子枕などいらぬ	黒枠の中でも彼奴笑ってる	唐津市 浜	明日の日を恐れず急ぐかたつむり	君よ翔べ私の石は重すぎる	人形になりきることのむつかしさ	旗揚げた男はすぐに死にたがる	島根県 松	活字にはならない良い句だってある	今に見ておれが停年近くなり	税務署が怖いと言えるよい身分	酒たばこ止めて何年生きのびる	尼崎市 中	冷水をかぶる若さをまだ残し	嫁さんの自慢しあった立話	飲むほどに大将になる父の癖	酒のあと出たようかんも遠慮せず
木					下					本					本					谷				
5	,				勝					久仁					文					利				
K	4				_					於					子					美				
家中を馬カセーンガ窓を出る	米子市		定年と思われたくない設計図	足早に歩き定年曲り角	橿原市	言葉ほど冷たい風はないと知り	変り身の鈍い夫でついていく	長生きのし過ぎと悟る秋の雨	穴埋めにされるへそくりでも溜める	旭川市	背中の龍惨めに萎む老やくざ	実らない稲穂へ用のない案山子	狂おしく灯を恋う蝶の焦げるほど	夜昼のリズムが狂う無精卵	倉敷市	優しさに又騙された姫達磨	古傷にふれてほしい人に逢う	戻って来て故里の山にざんげする	夫婦のカルテ犬もくわぬと書いてある	大阪市	首を振る尺八奥伝とくに終え	烏賊鳴いて海に最後の別れする	苔生えた野仏昔をしゃべらない	子供みなミルクで育て共かせぎ
家中を馬カセーンオ窓を出る	米子市 菅	年を意識せぬのは妻ひとり	と思われたくない設計	早に歩き定年曲り	西	葉ほど冷たい風はないと知	り身の鈍い夫でついてい	生きのし過ぎと悟る秋の	埋めにされるへそくりでも溜め	川市朝	中の龍惨めに萎む老や	らない稲穂へ用のない案山	おしく灯を恋う蝶の	昼のリズムが狂う無精	中	しさに又騙された姫達	傷にふれてほしい人に	って来て故里の山にざんげ	のカルテ大もくわぬと書いてあ	印鍛	を振る尺八奥伝とくに	賊鳴いて海に最後の別れす	生えた野仏昔をしゃべらな	供みなミルクで育て共
家中を 馬力セーン 力密を 出る	米子市 菅 井	年を意識せぬのは妻ひとり	と思われたくない設計	早に歩き定年曲り	西本	葉ほど冷たい風はないと知	り身の鈍い夫でついてい	生きのし過ぎと悟る秋の	埋めにされるへそくりでも溜め	川市朝倉	中の龍惨めに萎む老や	らない稲穂へ用のない案山	おしく灯を恋う蝶の	昼のリズムが狂う無精	中島	しさに又騙された姫達	傷にふれてほしい人に	って来て故里の山にざんげ	のカルテ大もくわぬと書いてあ	中鍛原	を振る尺八奥伝とくに	賊鳴いて海に最後の別れす	生えた野仏昔をしゃべらな	供みなミルクで育て共
家中を馬カセトンオ窓を出る。	米子市 菅	年を意識せぬのは妻ひとり	と思われたくない設計	早に歩き定年曲り	西	葉ほど冷たい風はないと知	り身の鈍い夫でついてい	生きのし過ぎと悟る秋の	埋めにされるへそくりでも溜め	川市朝	中の龍惨めに萎む老や	らない稲穂へ用のない案山	おしく灯を恋う蝶の	昼のリズムが狂う無精	中	しさに又騙された姫達	傷にふれてほしい人に	って来て故里の山にざんげ	のカルテ大もくわぬと書いてあ	印鍛	を振る尺八奥伝とくに	賊鳴いて海に最後の別れす	生えた野仏昔をしゃべらな	供みなミルクで育て共

幸福駅幸せそうな顔が降り結局は義理を立てとく板ばさみ東予市	真実の友へ悔ない旗を振る	老妻と飲むコーヒーのふしあわせ	空砲の鳴る向うから秋覗く	岡山市	どの顔も童顔になるクラス会	抱き合せの表と裏を見てしまい	ご機嫌を伺うように鏡見る	大阪市	松茸の匂いもかがず秋がゆく	暖房がありゴキブリに冬がない	妻の座に胡座かくほど長けていず	高槻市	泣きに来た戦争展へ老いひとり	こまぎれの知識つくろい子に応え	去年いた顔税務署にもうおらず	大阪市	就職へ三留年の汗止まず	伊勢海老の瑞気いや増す長い髭	詰込んで帰省の子待つ冷蔵庫	米子市	ジーパンで母娘と見えぬ登山靴	割箸を使って老母のフルコース
小				串				村				竹				大				野		
巾				\mathbb{H}				上.				内				野				坂		
悠				句昧				田鶴				花代				武				な		
泉				地				子				子				太				4		
風船の行方に夢をつめてやるぎりぎりに生きている風船の張り肺活へ旅行プラン泣かされて	広島市	間引菜は娘がとりに来るという	秋茄子を四、五本残し大根蒔く	となり田へ出水のゴミを押しておく	島根県	本心が義理のヴェールに見え隠れ	岩田帯しばしジーパンともわかれ	分校の夕餉へ一品届けられ	米子市	納屋の灯を消さんでほしい明日がある	台風のおかげひょうたんらしくなり	沖縄へ高い日焼けの旅に行き	島根県	考える人の像にも似た釣人	今月も財布の底を見てしまい	まんざらでない顔なので売れ残り	大和高田市	捨てたコスモスながらなお咲いて	何時来ても家家の座布団温かく	浴衣着て教師も盆の踊りの輪	島根県	台風へ我が家釘打つだけの策
	光				角				雑				福				岸				東	
	井								賀				間				本				原	
	4				耕				美				芳				豊平				福	
	ほ				草				世				枝				十次				子	

を を を を を を を を を を を の の の の の の の の の の の の の	少しだけなまけてみたい妻の座を美人観音もうおそすぎた出会いですつっぱって生きた老後の丸い背なっぱって生きた	補聴器が横着出来ない音も聞き流れ星終った恋の方へとび夜の匂いもって夜警は勤務終え来の匂いまって夜	ローカル線に人の情が温かい銀婚に夫婦の絆締め直しまい。この頭の中で回る独楽	とっさには嘘がでてこぬ電話ロヤング四人コーヒー二つでまだねばり頑固さがとれて凡夫になりさがり、大阪市	畳屋をせかす大安日が迫り シャボン玉まだ母さんは帰らない 蒸発を考えて見るだけの僕 今治市
仁	松	政	杉	白	渡
部] Л	岡	本	石	辺
四美紀		日枝	智慧		南
郎子	子	子	子	潔	奉
年金のくらしスーパーで考える 北枕するには事が残りすぎ 倉吉市	花火光と音が妥協せのよい夫婦は踏絵避ばれ種抵抗もなく土	心臓移植その後音沙汰なかりけり心臓移植その後音沙汰なかりけり	流行は云わず特売待っている 素人とあなどり釘が首を振る	釣り合いと云う人間の枠もあり 燃え尽きるまでを人間どう生きる 海原は客待ち顔の日が続き	膝枕浮世絵だけとは限るまい見て欲しい女の手品角かくし えで欲しい女の手品角かくし
野	浜	園	堀	泄	田
中	本	Ш	П	田	中
御	義	多賀	欣	**	柴
前	美	子	-	仙	浪

背信へ一本杉は天を突く	引金とならぬ自重の口つぐみ	岡山県	頭文字ガラスに書いて雨を聞く	哀しさをかくす仮面がずれてくる	一人住む女ある日の市場かご	高知県	微動する世界に驚く顕微鏡	よっぽどの心の痛手か一人言	夢の中亡母ニコニコ顔でいる	青森県	会社破産しても社長破産せず	目覚ましベル私の今日の幕開ける	日本海いつまでこの名で呼べるやら	堺市	威勢よいおならの病人ほめてやり	秋祭すんで空カン壜の山	定年はないが限界きた力士	岸和田市	リハーサル出来ぬ人生夜が明ける	自販機の切符待つ間も時計みる	もう電話かけるとこない雨三日	広島県	一冊の手帖が疑惑喋り出す	郷愁をそそるテレビの笛太鼓
		木				赤				波				田				津				砂		
		村				Щ				١.				辺				田				田		
		柳				菊				ただ				哲				Ŧ				静		
		昇				野				お				男				舟				佳		
千代紙を切って童画の夢に酔う	央 市 山	逢いたくて受話機かけたりはずしたり	ひげ剃って無職の男の顔ができ	出雲市	クリスタルガラスだから過信する	草笛を吹けば童心廻りだす	鳥取県和	有閑マダムの様に白ねこのびをする	ショーウインドーに先ず秋が来て心急く	松原市本	丸い窓欲しい老後の設計図	空白の今日の夕焼やるせなく	西宮市 妹	棘のある言葉背中で聞き流し	観光地の猿は人間臭くなり	今治市 新	才たけて美しき女の離婚歴	限界と諦めながらまた挑み	唐津市 桑	洪水はここまできたと壁の色	引き裂かる迄神棚の宝くじ	御仏も子と走りたい寺の庭	熊本県 成	年寄りの嬉しい愚痴へ耳が馴れ
	根			岡			井			多			尾			居田			不原				瀬	
	111			きみ			観			洋			春			胡頹			掬				月	
	丕			Ż			洋			1			ΊĽ			子			詂				仙	

いいやつはやっぱりまぶたに残ってるあの頃の夜は仁丹ネオンだけ	東大阪市 三 宅 哲	脱サラのもうペンだこへ用がなし	見て見ない振りを見られていたうなじ	熊本市 有 働 芳	仲秋の月を待つ間も虫すだく	鳥取県 羽津川 公	孫等去に静かになりて蟬時雨	蚊やり香たくベランダに遠花火	高知県 山 下 登	笑窪まで母に似て来た二女三女	三日月が消えた女の風呂上り	寝屋川市 立 床 晴	飲むだけが取柄停年近うなり	横文字のカルテへ医者を信じよう		大臣をくんづけにして時事放談	残された子の自転車に赤とんぼ	弘前市 田 中	制服を着て校則がじゃまになり	叱ってる母のまぶたも濡れている	山口県高崎喜	自画像が動いて仮面つけたがる
	夫			fili		15			护·			風			īE.			11			-	
消印が動かぬ証拠嘘がばれ 鳥取市 武	コンピューター大きな数字は馴れている	大阪市 林	潮ひいてやどかり一匹逃げおくれ	実らない稲田の稗を抜く農婦		秋風がひ弱い夏をおしのける			りのない			直鎖女三一の顔を持ち		反の道・プリに矢ノだ。しては言	台風の通っに長こ即人なこ	持 君王 11 - 1	j	入歯私の年金一呑みに		それぞれの思い出八月十五日	子が見てる夫婦喧嘩が不発する	交野市 山
H					森		((d)			對			ŧ			仔			藤			本
帆雀		ひろ子			登章		三千代			此			謂			礼			静枝			テルミ

萱草の切り口揃う鎌の切れ 尾鷲市 渡 辺 伊津志 阿呆になる狡さの演技も心得て 異覧市 渡 辺 伊津志	県 中 田 白	大阪市 田 ふ み 終れば空し待つ間が花の夏休み 生きる厳しさ盆休みもなしに小商売 内 藤 ますえ 此の話少しは反対期待する 大阪市 内 藤 ますえ	の利いた嫁と云われての利いた嫁と云われてみ	図需らした崔夫意の类に以て 金借りに来たと思えぬ高笑い ・ 八戸市 島 田 昭 治 エリートをお通しする道開けてあり
善人の背なに色紙の美しき 関悩を捨てろと浮草風に浮き 大阪市 藤 森 小雅子なにげなく割る箸にさえ艶があり	はまだ元気で母に起されつける時だけ母の手を借みたい本積んで気分が満	難鬼呼ぶ笛しみわたる古都の秋 離鬼呼ぶ笛しみわたる古都の秋 離鬼呼ぶ笛しみわたる古都の秋 離鬼呼ぶ笛しみわたる古都の秋 離鬼呼ぶ笛しみわたる古都の秋 かとんぼ追う目が年齢を忘れさせ 米子市 寺 沢 みど里	ソと骨壺の亡夫語り出し 島根県 岩 田 三 生に保険も掛けて栄転し	**とうりの下手まで母に似てしまい。これからへ夢は大きく持ち続けったがは大きく持ち続ける。 和歌山県 杉 山 精 子 微笑みが消えた唇皺が寄り

島根県 山 根 峰 雪	という字は矛盾の代名詞 島根県 山 根 峰 雪ありと思い出浮かぶ軍事便 のようにすぐおこる夫といる 八尾市 田 中 紀美代 色あざやか入道雲の湧き 大阪市 野 田 君 枝 りが年寄りかばい席ゆずり 四の瞳に足りぬ分校舎 渡田市 佐 々 木 裕	四の瞳に足りぬ分校舎 四の瞳に足りぬ分校舎 四の瞳に足りぬ分校舎 四の瞳に足りぬ分校舎 変を引かばい席ゆずり のようにすぐおこる夫といる のようにすぐおこる夫といる のようにすぐおこる夫といる 大阪市 野 田 君 枝 りが年寄りかばい席ゆずり のようにすぐおこる夫といる 大阪市 野 田 君 枝 一 一 和 美代 一 本 一 一 和 美代 一 本 一 一 和 一 和 一 和 一 和 一 和 一 和 一 和 一 和 一	四の瞳に足りぬ分校舎 四の瞳に足りぬ分校舎 四の瞳に足りぬ分校舎 変屋川市 福 富 隆 子	市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市
島根県 山 根 峰 雪ありと思い出浮かぶ軍事便 0 本	思いう字は矛盾の代名詞 島根県 山 根 峰 雪ありと思い出浮かぶ軍事便 のようにすぐおこる夫といる のようにすぐおこる夫といる 八尾市 田 中 紀美代 色あざやか入道雲の湧き 大阪市 野 田 君 枝 りが年寄りかばい席ゆずり 浜田市 佐 々 木 裕	四の瞳に足りぬ分校舎 四の瞳に足りぬ分校舎 四の瞳に足りぬ分校舎 八尾市 田 四 四 四 四 四 四 四 四 四	四の瞳に足りぬ分校舎 四の瞳に足りぬ分校舎 大阪市 野 田 君 枝 中 紀美代 日 四の瞳に足りぬ分校舎 八尾市 田 中 紀美代 日 田 西 田 田 田 田 田 田 田 田 田 田 田 田 田 田 田 田 田	市 市 市 市 東 市 市 東 市 市 市 東
島根県 山 根 峰 雪 りありと思い出浮かぶ軍事便 大阪市 野 田 君 枝 大阪市 町 田 和 和 和 和 和 和 和 和 和 和 和 和 和 和 和 和 和 和	高りが年寄りかばい席ゆずり 高りが年寄りかばい席ゆずり 高りが年寄りかばい席ゆずり 本 高根県 山 根 峰 雪 りありと思い出浮かぶ軍事便 大阪市 野 田 君 枝 大阪市 野 田 君 枝	同う机の暑さかな 同う机の暑さかな 同う机の暑さかな にび所にといる 大阪市 野 田 君 枝が年寄りかばい席ゆずり が年寄りかばい席ゆずり が年寄りかばい席ゆずり 派田市 佐 々 木 裕	かに生きる男の広い肩 岡山県 松 本 元 江 幼馴染の顔であい 岡山県 松 本 元 江 幼馴染の顔であい 松江市 豊 田 巡 歩で所詮遺書など用はない 吹田市 藤 原 世史春とのように凶作きき流し 吹田市 藤 原 世史春とのように対作きき流し 以 中 と思い出浮かぶ軍事便 島根県 山 根 峰 雪りと思い出浮かぶ軍事便 人尾市 田 中 紀美代 あざやか入道雲の湧き 人阪市 野 田 君 枝が年寄りかばい席ゆずり 田 君 枝 不 裕	市 市 市 市 県 市 市 県 市 市
高りありと思い出浮かぶ軍事便 りありと思い出浮かぶ軍事便 戻のようにすぐおこる夫といる 大阪市 田 中 紀美代 の色あざやか入道雲の湧き 大阪市 野 田 君 枝	高りありと思い出浮かぶ軍事便 りありと思い出浮かぶ軍事便 りありと思い出浮かぶ軍事便 りありと思い出浮かぶ軍事便 大阪市 田 中 紀美代 の色あざやか入道雲の湧き 大阪市 野 田 君 枝	向う机の暑さかな 向う机の暑さかな 向う机の暑さかな をごからに凶作きき流し いう字は矛盾の代名詞 いう字は矛盾の代名詞 島根県 山 根 峰 雪 りと思い出浮かぶ軍事便 ようにすぐおこる夫といる ようにすぐおこる夫といる 大阪市 野 田 君 枝 が年寄りかばい席ゆずり	かに生きる男の広い肩	市 市 市 市 市 市 市 市 東 野 田 大 山 藤 豊 松 田 中 工 根 田 本 元 君 紀 井 世 史 表 大 枝 子 雪 歩 江
1	立という字は矛盾の代名詞 立という字は矛盾の代名詞 りありと思い出浮かぶ軍事便 泉佐野市 大 工 静 子 炭のようにすぐおこる夫といる 八尾市 田 中 紀美代 の色あざやか入道雲の湧き 大阪市 野 田 君 枝	知馴染の顔であい 対馴染の顔であい 向う机の暑さかな に眠られず 吹田市 藤 原 世史春 とのように凶作きき流し いう字は矛盾の代名詞 いう字は矛盾の代名詞 りと思い出浮かぶ軍事便 泉佐野市 大 工 静 子 まうにすぐおこる夫といる 八尾市 田 中 紀美代 あざやか入道雲の湧き 大阪市 野 田 君 枝	かに生きる男の広い肩 岡山県 松 本 元 江 幼馴染の顔であい 岡山県 松 本 元 江 幼馴染の顔であい 松江市 豊 田 巡 歩 で所詮遺書など用はない 松江市 豊 田 巡 歩 で所詮遺書など用はない 吹田市 藤 原 世史春とのように凶作きき流しいう字は矛盾の代名詞 島根県 山 根 峰 雪りと思い出浮かぶ軍事便 泉佐野市 大 工 静 子ようにすぐおこる夫といる 八尾市 田 中 紀美代あざやか入道雲の湧き 大阪市 野 田 君 枝	市 財 出 出 土 上 </td
1	立という字は矛盾の代名詞 島根県 山 根 峰 雪りありと思い出浮かぶ軍事便 泉佐野市 大 工 静 子 炭のようにすぐおこる夫といる 八尾市 田 中 紀美代	対馴染の顔であい 対馴染の顔であい 向う机の暑さかな で所詮遺書など用はない 英霊静かに眠られず 吹田市 藤 原 世史春 とのように凶作きき流し いう字は矛盾の代名詞 いう字は矛盾の代名詞 島根県 山 根 峰 雪 りと思い出浮かぶ軍事便 泉佐野市 大 工 静 子 ようにすぐおこる夫といる 八尾市 田 中 紀美代	かに生きる男の広い肩 岡山県 松 本 元 江 効馴染の顔であい 岡山県 松 本 元 江 効馴染の顔であい 松江市 豊 田 巡 歩 で所詮遺書など用はない 松江市 豊 田 巡 歩 で所詮遺書など用はない 松江市 豊 田 巡 歩 で所詮遺書など用はない 水田市 藤 原 世史春 とのように凶作きき流し 中 起手のと思い出浮かぶ軍事便 島根県 山 根 峰 雪 りと思い出浮かぶ軍事便 山 根 峰 雪 りと思い出浮かぶ軍事便 小 中 紀美代	市 市 市 市 東 市 市 市 市 市 県 田 大 山 庫 松 中 工 根 田 本 紀 静 世 近 元 大 子 雪 歩 江
東佐野市 大 工 静 子 泉佐野市 大 工 静 子 泉佐野市 大 工 静 子 泉佐野市 大 工 静 子 日 中 紀美代	大尾市 田 中 紀美代 のようにすぐおこる夫といる 京佐野市 大 工 静 子 泉佐野市 大 工 静 子	同う机の暑さかな 向う机の暑さかな 一点にすぐおこる夫といる 大工静子 ようにすぐおこる夫といる 八尾市 田 中 紀美代	かに生きる男の広い肩 岡山県 松 本 元 江 幼馴染の顔であい 岡山県 松 本 元 江 幼馴染の顔であい 松江市 豊 田 巡 歩で所詮遺書など用はない 吹田市 藤 原 世史春とのように凶作きき流しいう字は矛盾の代名詞 島根県 山 根 峰 雪りと思い出浮かぶ軍事便 島根県 山 根 峰 雪りと思い出浮かぶ軍事便 八尾市 田 中 紀美代	市 市 県 市 市 県 市 市 県
炭のようにすぐおこる夫といる 泉佐野市 大 工 静 子りありと思い出浮かぶ軍事便 島根県 山 根 峰 雪		知馴染の顔であい 対馴染の顔であい 対馴染の顔であい 大 正 静 子 とのように凶作きき流し とのように凶作きき流し とのように凶作きき流し とのように凶作きき流し 場根県 山 根 峰 雪 りと思い出浮かぶ軍事便 泉佐野市 大 工 静 子	かに生きる男の広い肩	市 東 市 市 市 市 東 大 上 世 上 上 上 </td
りありと思い出浮かぶ軍事便 島根県 山 根 峰 雪 夫婦	りありと思い出浮かぶ軍事便 りありと思い出浮かぶ軍事便 島根県 山 根 峰 雪 夫婦	明山県 松 本 元 江 対馴染の顔であい 阿う机の暑さかな 大霊静かに眠られず 大霊静かに眠られず 大田市 藤 原 世史春 とのように凶作きき流し いう字は矛盾の代名詞 いう字は矛盾の代名詞 いう字は矛盾の代名詞 島根県 山 根 峰 雪 夫婦 りと思い出浮かぶ軍事便 泉佐野市 大 工 静 子 鏡掛	のうれの暑さかな 岡山県 松 本 元 江 知事後の顔であい 同うれの暑さかな 松江市 豊 田 巡 歩 痛い で所詮遺書など用はない 松江市 豊 田 巡 歩 痛い かいう字は矛盾の代名詞 以のように凶作きき流し いう字は矛盾の代名詞 島根県 山 根 峰 雪 夫婦りと思い出浮かぶ軍事便 りと思い出浮かぶ軍事便 りと思い出浮かぶ軍事便 りと思い出浮かぶ軍事便 ち婦	の D v / F かな 岡山県 松 本 元 江 かな 松江市 豊 田 巡 歩 痛い られず 吹田市 藤 原 世史春 られず 吹田市 藤 原 世史春 がぶ軍事便 山 根 峰 雪 持筒 かぶ軍事便 海に野市 大 工 静 子 りに 毎 日 ※ りに 日 ※
りありと思い出浮かぶ軍事便 鏡掛県 山 根 峰 雪 夫婦	りありと思い出浮かぶ軍事便 鏡掛	りと思い出浮かぶ軍事便 りと思い出浮かぶ軍事便 りと思い出浮かぶ軍事便 りと思い出浮かぶ軍事便 りと思い出浮かぶ軍事便 りと思い出浮かぶ軍事便 りと思い出浮かぶ軍事便 りと思い出浮かぶ軍事便 りと思い出浮かぶ軍事便 りと思い出浮かぶ軍事便 りと思い出浮かぶ軍事便 りと思い出浮かぶ軍事便 競掛 競掛 に取る を	りと思い出浮かぶ軍事便	の 点 以 扉 岡山県 松 本 元 江 かな 〇 点 以 扉 かな 松江市 豊 田 巡 歩 痛い られず 吹田市 藤 原 世史春 作きき流し 世史春 の代名詞 山 根 峰 雪 夫婦 かぶ軍事便 修羅
根県 山 根 峰 雪 夫婦	立という字は矛盾の代名詞 島根県 山 根 峰 雪 夫婦	関山県 松 本 元 江 対馴染の顔であい 一	のように凶作きき流し とのように凶作きき流し とのように凶作きき流し とのように凶作きき流し とのように凶作きき流し とのように凶作きき流し とのように凶作きき流し とのように凶作きき流し とのように凶作きき流し とのように凶作きき流し とのように凶作きき流し とのように凶作きき流し	の D v / F の D v / F の D v / F めな めな 松江市 豊田 巡歩 痛い られず 吹田市 藤原 世史春 修羅 おい が出 本元 ボン おこ
	立という字は矛盾の代名詞	知馴染の顔であい 阿う机の暑さかな 英霊静かに眠られず で所詮遺書など用はない 大霊静かに眠られず 吹田市 藤 原 世史春 とのように凶作きき流し いう字は矛盾の代名詞 いう字は矛盾の代名詞 にいる。 にい。 にいる。 にい	のように凶作きき流し いう字は矛盾の代名詞 いう字は矛盾の代名詞 いう字は矛盾の代名詞 いう字は矛盾の代名詞 いう字は矛盾の代名詞 いう字は矛盾の代名詞 いう字は矛盾の代名詞 いう字は矛盾の代名詞 いう字は矛盾の代名詞 いちりに凶作きき流し いう字は矛盾の代名詞 いう字は矛盾の代名詞	の 点 以 扉 岡山県 松 本 元 江 かな かな 松江市 豊 田 巡 歩 痛い かな 松江市 豊 田 巡 歩 痛い ど用はない ど用はない それず 吹田市 藤 原 世史春 封筒 で、田市 藤 原 世史春 (修羅)
人ごとのように凶作きき流し		英霊静かに眠られず と 田 巡 歩 痛い向う机の暑さかな 松江市 豊 田 巡 歩 痛いが ポン が馴染の顔であい と おっぱん かん こ 江 と から は かん こ 江 と から は かん こ 江 と から から は から は から から と から	英霊静かに眠られず 出 巡 歩 痛い のう机の暑さかな 松江市 豊 田 巡 歩 痛い がいときる男の広い肩 松 本 元 江 ポン が野染の顔であい 松江市 豊 田 巡 歩 痛い ポンポン	ず はない
人ごとのように凶作きき流し 吹田市 藤 原 世史春 修羅の	市 藤 原 世史	で所詮遺書など用はない 超山県 松 本 元 江 おかり こうれの暑さかな 松江市 豊 田 巡 歩 痛いポンめ馴染の顔であい	で所詮遺書など用はない 超山県 松 本 元 江 おり 場外の顔であい かに生きる男の広い肩 四山県 松 本 元 江 ポンカ馴染の顔であい 松江市 豊 田 巡 歩 痛いポン	はない と
人ごとのように凶作きき流し 吹田市 藤 原 世史春 封筒の国の英霊静かに眠られず	の英霊静かに眠られず 吹田市 藤 原 世史春 封筒の	向う机の暑さかな 松江市 豊 田 巡 歩 痛い幼馴染の顔であい 岡山県 松 本 元 江	向う机の暑さかな 岡山県 松 本 元 江 ポン幼馴染の顔であい 岡山県 松 本 元 江	松江市 豊 田 巡 歩 痛い ポン
人ごとのように凶作きき流し 吹田市 藤 原 世史春 封筒の国の英霊静かに眠られず 吹田市 藤 原 世史春 封筒のる裸で所詮遺書など用はない	国の英霊静かに眠られず 吹田市 藤 原 世史春 封筒のる裸で所詮遺書など用はない 若さと	向う机の暑さかな 岡山県 松 本 元 江	向う机の暑さかな 岡山県 松 本 元 江 日本のかに生きる男の広い肩	レ肩 岡山県 松 本 元 江 ポ
人ごとのように凶作きき流し 松江市 豊 田 巡 歩 痛い	英霊静かに眠られず 吹田市 藤 原 世史春 封筒で所詮遺書など用はない 松江市 豊 田 巡 歩 痛い	幼馴染の顔であい 岡山県 松 本 元	幼馴染の顔であい 岡山県 松 本 元 江 日本のかに生きる男の広い肩	岡山県 松 本 元 江
人ごとのように凶作きき流し 松江市 豊 田 巡 歩 痛い切へ向う机の暑さかな 松江市 豊 田 巡 歩 痛いおき裸で所詮遺書など用はない 水田市 藤 原 世史春 封筒 ポン	英霊静かに眠られず 吹田市 藤 原 世史春 封筒 で所詮遺書など用はない 松江市 豊 田 巡 歩 痛い 若さ	山県 松 本 元	たたかに生きる男の広い肩 松 本 元 江 日本の	岡山県 松 本 元 江
とのように凶作きき流し 修羅 とのように凶作きき流し 吹田市 藤 原 世史春 おいこのうれの暑さかな 松江市 豊 田 巡 歩 痛い だと おさ だり はい かり いっぱい いっぱい いっぱい いっぱい いっぱい いっぱい いっぱい いっぱ	英霊静かに眠られず で所詮遺書など用はない 松江市 豊 田 巡 歩 痛い おさ ボン幼馴染の顔であい		たたかに生きる男の広い肩	した
とのように凶作きき流し 修羅とのように凶作きき流し 桜江市 豊 田 巡 歩 痛いがに生きる男の広い肩 松 本 元 江 別馴染の顔であい 松江市 豊 田 巡 歩 痛いが 一下 経遺書など用はない 吹田市 藤 原 世史春とのように凶作きき流し	英霊静かに眠られず 吹田市 藤 原 世史春 封筒 で所詮遺書など用はない を霊静かに眠られず 吹田市 藤 原 世史春	言わないことにする出		豊中市 満 仲 きく子 自閉症知らない間をば取って来る

魚

香

男

明

(到着順)

河井庸佑

え難い親子の宝といえよう。

運動会わが子ばかりを追うカメラ

運動会の当日である。早朝より、保護者席 見つけるのに苦労する。やっと見つかった。 ファインダーを覗き、わが子を追跡する。こ れをそばで見ていて、この句が生まれた。 澄み切った青空、秋はまさに運動会シーズ 沙である。子ども達は、日々の学校生活の中 で練習を重ねた成果を披露する晴れの舞台で あり、いっそう熱がはいる。

ら離れない。 ら離れない。 を残そうとレンズは、わが子かる。この様子を残そうとレンズは、わが子かる。 は、日頃家庭で見るのと違うわが子の活

親を慕うひたむきな心、これこそ、何にも替り、そばで見ていても心はなごみ、暖まるほり、そばで見ていても心はなごみ、暖まるほ親なればこそ子を思う暖い愛情の表れであ

ある。

有信新之助

統計の通りに冷めた若い愛

私の娘も、少しふくらんできてから、式を挙げた口ですが、当日、式場で先方の両親とモーニング姿で「初めまして、今後共によろしく……」と、挨拶を交わしたほどの、ざっくばらんの縁組でした。それから六年余、二児の母になって、月に一、二度、婿の運転で孫を連れてやってきますが、スーパーの買物代金を、一緒に行った家内に全部払わせて、さっさと帰ってしまう家内に全部払わせて、さっさと帰ってしまうまたり、万事その要領で、舅姑三人の小姑と姑の姉の大家族の中で、愚痴をこぼす暇もないほど充実した日々を送っているようです。その安堵感が、この句を作らせたのかも知れません。自解するまでもない、分り易い句れません。自解するまでもない、分り易い句れません。自解するまでもない、分り易い句れません。自解するまでもない、分り易い句れません。自解するまでもない、分り易い句れません。

年半位で破局がくるようです。

香川酔

7

月蝕を仰ぐことなく島に棲む

浮かんだとき、 あろう。ふと、彼女の姿が、わたしの脳裏に もその島には無かった。祖母の妹は、 瀬戸内の島に棲む老いた人々の姿だったので ているのか知らないようである。戦争当時の のことには全く没交渉、この世で何が起こっ のその小さな島を、はじめて訪ねた。 た昭和16年のことである。実習の帰りに四国 争が泥沼にはまり込んでどうにもならなかっ 所に夏期実習に出かけたことがある。 当時九大の学生だったわたしが、三井玉造船 そり住んでいた。四十年も前のことである。 には、祖母の妹が、一族にとりまかれてひっ であるが、比較にならぬほど小さな島である。 ある。名を大島という。今治沖の大島と同名 この小さな大島が祖母の故郷である。その島 みるとその上方、瀬戸内に浮かぶ小さな島が (俳句公論68号に発表した小文に加筆したもので 子讃本線に多喜浜という駅がある。地図で この句が生まれた。 世の中 ラジオ 日中戦

児島与呂志

当然の苦行自慢する若い僧

永平寺にて

て後悔するものであると思う。
て後悔するものであると思う。
に後悔するものであると思う。

私がこの句を作った時に、雪の降る寒さにも見して、永平寺のきびしいしきたりと永平自慢して、永平寺のきびしいしきたりと永平うに思えたが、また、一生懸命な若い僧の心うに思えたが、また、一生懸命な若い僧の心を考えていたように思う。

私は昭和十八年二月一日に三十七連隊に二 等兵で入営した。第一回の面会に母が私のし もやけにくずれた手の甲をさすりながら涙を もやけにくずれた手の甲をさすりながら涙を 当然の事ではなく国に召されていたのである。 当然の事ではなく国に召されていたのである。 といたので、あれは自分の不注意だったのだと いたので、あれは自分の不注意だったのだと

高杉鬼遊

妻とふたり今日あるいのち花の下

となって宙を遊泳するのであった。 散る生のはかなさを感じさせられるものであ 空に湧き溢れる花を見上げていると、いずれ 桜があり、花の盛りには大変賑わうのである ともないが、家の近くの玉串川畔には沢山の うちでは自分の生についていろいろ考えてみ 花見頃なので、うきうきする反面、こころの らといって別に何もしないが、季節が丁度、 ラーは(一八八九)四月十日。英雄と凡夫は らずも吉川幸次郎氏が逝去された。 歳まで生きて来られた感慨が、花と渾然一体 る。父の死んだのが六十歳であり、私も父の ってぶらりと出かけた。ばんぼりに映えて夜 今年は四月八日が見頃で夕食後、妻と連れだ たりする。花見だからとわざわざ遠出するこ 紙一重とよく云ったものである。誕生日だか んが生まれたのが四月八日。アドルフ・ヒト 四月十二日は私の誕生日である。お釈迦さ 本日はか

板尾岳人

峰歩く男はピアノ弾きながら

く川柳を創りたい。山の峰々の美しさに出会かめるために山を歩くのだ。そして納得のいわたしは川柳の周辺に対する諸疑念をたし

ことが出来る。それは子供が無心に絵を描くことが出来る。それは子供が無心に絵を描くことが出来る。それは子供が無心に絵を描くとは自然に身についたもので、豊かなかかわたしの今は奇妙に索漠とした知性の中にとどまっている。豊かさをどうしても見失ってしまったのか、それが一見無秩序とも見らてしまったのか、それが一見無秩序とも見られかねないわたしの川柳に一貫して山のたくましさが与えられるために、これからも山の様々をリズムをつけて飛び歩きたい。そして作句技術の精密化にいそしみ山の句を創作せればなるまい。

河野君子

最も得意なポーズで階段下りている

ある川柳雑誌の中で「何か得意なことがありますか」の質問に、「階段をかけ下りること。いくら急いでも、まっ暗闇でも」の答えを目にした。瞬間、私はこの答えに百パーセントの共感を得たのです。そしてその時、自分の本音をさらけ出したのが、この一句なのです。

るかも知れぬ怖さを越えて、私なりのひとつ もっとも得意なこのポーズは、闇の中へ下り ポーズの美事さへ、私の辛さ、哀しさがある 文芸(川柳)の階段も、上ることより降りる にもみごとに決まっている。人生の階段も、 から安易に下りてしまう。そのポーズは皮肉 向って上らねばならぬのに、上ることの辛さ も高いもの。昨日は下りても、今日は明日へ の美学?にしたいと思っている。

小 出 智 子.

新しいカレンダーほど強くなし

と同時に、一年の半分を何と無意味に過した 月の眩ゆいばかりのカレンダーに夏を感じる 過ぎてしまっている。 はと考えていたことが何も手付かずのままに ことかと、反省はするものの結局、 に小さな悔がつきまとう。六月が終って、七 なってしまった。毎月カレンダーを剝ぐたび 今年もカレンダーはあと一枚を残すのみと 今年こそ

す。新しいカレンダーに秘められた期待と抱 負は、このようにして毎年崩れ去ってゆくの ンダーに、私なりの腑甲斐無さを感じるので そして今、あと一枚になってしまったカレ

です。

ても、ささやかな夢を託すことであろうこと あるが、新しく掛けるカレンダーに、またし 来年もまた一つ齢を重ねることの忙しさは 私にとっても幸せなことである

橘 薫 風

恋人がいま肉眼に入り来る

りくると読んだ方がいいと思われる方もおら れるだろう。 から選んでいる。第三句集は した私は、それぞれの題名を、 座五は、いりきたると読む。 有情・檸檬・肉眼と、過去三冊の句集を出 「肉眼」だった。 その中の一句 しかし、

うもの、絵空ごとではなく、温かい血の通っ を披歴してもいるのである。 た肉眼で見つめて行きたいという現在の心境 以前の長い感情とを併せ表現したかったのだ。 けである。その感動と、いま肉眼に入り来る くて、見通しのきくところから近づいて来る ぐらし続けていた恋人が現実に見えて来たわ 受けとって欲しい。夢や幻、頭の中で思いめ ような静かな感情だ。それを句のリズムから これは恋人が突然目前に現われたのではな 句集の題名としての「肉眼」は、作品とい

富 田林市文化祭 民川 柳大 会

日 時 昭和55年11月9日(日)

会 場 東ますえ別館 十二時開場

題 話 近鉄線富田林駅下車東三百米 富柳会会長 岩本 雀踊子 選

狗

室田

柳

土壇場 K 水 ДH 物 楠 定金冬二 高 燕 風 栞

一題・当日発表 兼題とも三句以内

部

席

題

午後一時三〇分

五〇〇円

会

切

愁親宴 鍋物(希望者のみ当日受付)

後援·富田林市富柳会 主催・富 富田林教育委員会 \mathbb{H}

第 16 口

はたらく うた

同人特集

市 場 没 食子

足止めに会社の株も持たされた 保安帽落成近いビル見上げ 遮断器が今日も遅刻にしてくれた 三十年勤続黒のネクタイで 老化予防に働いてると笑っとき

> 職して健康なまま十五年もまた勤めた。 到達ということもあって、やれやれは束の間 来るというもの。 で、自らも楽しく「はたらくうた」も生れて 知れない。何にしても働けるのは結構なこと 命が延びて、自然の条理がそうさせるのかも れぞれ働いていられる。だんだんと人間の寿 五月の連休が終ると、医薬品の卸問屋へ再就 私の身辺の人達も、健康な方は定退後もそ 合計したら五十年も勤めたことになる。

会社役員

内

海

4:

ペンペン草棲みにくうても生きている 頂上でゆっくり外す鬼の面 三猿をきめれば仏の面くれる 目を信じ足を信じて蹴躓く ものを言う口を塞いだパンである

善者どもが歪める口元を真正面から見下ろし 「食うため遊ぶため」と躊躇なく答える。偽 「貴方は何のために働くか」と聞かれたら

> 甚しい。人には本音と建前がある。 て、それに嵌め込もうとする。思い上がりも の生き方があるのである。己を他を定規にし てそう言い切る。人にはそれぞれ、それなり

も後任が決まらず、四月末にやっと引継ぎに

て定年退職となったが、年度末の三月が来て

りにも永年勤続の表彰を受け、三十五年勤め

逓信局から電々公社へと籍が移り、曲りな

えても本音川柳を求め続けたいと思う。 転げ廻りたくなる。たとえ爪弾きの音が聞こ くなる。本音の迸る川柳に出会うと嬉しくて て!! 格言のような川柳に出会うと気分が悪 本音でない川柳なんて!! 建前論の川柳なん きされるだろう。川柳界ではどうなのだろう。 ら最高だと思う。然しおそらく許されず爪弾 一般社会で本音ばかり吐いて生きて行けた

坂 公 7

打ち水へ違った葉音で礼が来る 寝ころべば星がそこまで降りて来る 新人の顔で雑草そっと咲く 愛それはそれは鋭い刃物です 観念をした時心の夜が明ける

を負ぶって町の露店の列に。持って行ったカ けをと云うことになった。漸く一ヵ月の長男 く召されて行った教師仲間の奥様達とお金儲 た夫へ半年後長男誕生。於鞍山である。同じ 痛快な私の。働く譜。!終戦十日前召され

の頃川柳をやっていたらと残念至極である。 な テーラ等明日も分らない日本人にとっては な カステーラ は がりの食事が幾日続いがな カステーラ ばかりの食事が幾日続いがな カステーラ ばかりの食事が幾日続いたろうか。も一つ石鹼を売りに行った。手製である! 赤ん坊を負ぶった私に初に訪問の満たもと吹きをが皆置いてけと云うのである。で翌人散髪屋が皆置いてけと云うのである。で翌人散髪屋が皆置いてけと云うのである。で翌日である。

会社員井上柳五郎

あの老友も辞めたと老父の重い靴再職へまだ貯めるかとひやかされ再職は祝日給のないつとめ批判する知識ぼつぼつ仕事慣れ批判する知識でのぼつ仕事慣れ

会、浜田久米雄先生の御指導を受けながら未人の行吉照路さんに誘われ「川雑岡山」へ入人の行吉照路さんに誘われ「川雑岡山」へ入人の行吉照路さんに誘われ「川雑岡山」へ入しかいる私です。

石垣花子

だ命ある句にはほど遠い未熟者です。

馬鹿になる知恵の無いのが職を替え新雪は新聞配る僕が踏み地下工事勤労感謝の日も進み地下工事勤労感謝の日も進み

日につくグループの方々が幸せにのんびりし 目につくグループの方々が幸せにのんびりし 目につくグループの方々が幸せにのんびりし 目につくグループの方々が幸せにのんびりし 日につくグループの方々が幸せにのんびりし 日につくグループの方々が幸せにのんびりし 日につくグループの方々が幸せにのんびりし 日につくグループの方々が幸せにのんびりし

懸命について走っております。ばかり十四、五名のグループの皆さんに一生ておられるせいかも知れません。現在も女性

兼主婦 柴 田 英 壬 子

誠実も売るので足に豆が出来古参には古参の意地がテレックス古参には古参の意地がテレックス上役がひそかに神経科へ通い上役がひそかに神経科へ通い

老いて虚しく生くるなり」とか、のためにも。 老いて虚しく生くるなり」とか、のためにも。 老いて虚しく生くるなり」とか、のためにも。

橘 高 薫 風 選

より添うてひとつランプに灯をともす 代議士と医者の息子は後を継ぎ いつか花咲こう母娘の辿る道 誤診でも治らなくても医者は金 和歌山市 幸 しみじみと小人と知る虫の声 色即是空流れの中に身をまかす おしはかるだけ大仏の鼻の穴

H 垣 ħ 大

倉敷市

幡

里

風

大阪市

弘

生

Ш

酔

17

巣をつくる蜘蛛大学は出ておらず

老妻の合せ鏡も秋日和 ある解脱女九月の髪を斬る

探そうとすると欠点ないお方 虫の声ほおづえをつく机あり 7 秋の風或る日別れてそれっきり ビールなら飲める女のまだひとり

花 平田市 角

高

橋

4

台風の雲が飛ぶ飛ぶ稲架補強 台風の針路百姓が賽をふる

煩悩の闇を迷うて来た揚羽 和歌山市

告白は坐り直して聞いてやる 恋多き女の帯は七彩で 殺屋川市

臆病な妻とゴキブリ知っている

嘘つけば女は喋り止めてくれ 計報まで風の便りになる疎遠 给

藤井寺市

児

島

黒点となって別れて敵となる 農衣では通れぬほどに市街化し 木

ずり落ちた眼鏡の先の悟りかな 米子市 天理市 37

木

Ŧ.

代

原

静

步

白い花あつめた庭に生き残 青森市 I

藤

1

吉

村八分のように老いの一間なり

口笛の吹けぬ女で芋ふかす 女かや小説ごっこが大好きで

岡山市

清

水

金太郎

足ぶみを許さぬ老いの下り坂 四国路の連れの余生がよくも似る

富田林市

美

代

さわやかな秋新聞に爪が飛ぶ 宝くじ日本人はよく並び

島根県

村

早

苗

珈琲を飲むのに友達などいらぬ 逝ってからの父には無理が言いやすし

原

宵

明

雪晴れて男と女行き場なし

声も啼かぬ散髪屋のオウム

大阪市

出

智

7

華やかな涙にさせた葡萄酒よ 豊かな実の一つをご先祖に奉る

読みさしのかの子撩乱枯れている

岸和田市

原

道

夫

岡山市 端 柳

耕 草

浦 野 和 子

感情を殺して海鳴りを聞こう

土に還る日は何時のこと曼珠沙華

小

野

富美子

島根県

樋

原

秀

7

[11]

村

満

倉敷市

水

粉

Ŧ

翁

受験児へ夫婦疎遠な日がつづく

枚方市

度

自画像の何と淋しく目を伏せる

高知市

惠

長庫県

进

文

4

与呂志 風呂敷を拡げて気付く花の彩

着つくした揚句に白のよさを知 京都市 Ш 杜:

的

衣替え厨に立つをさだめと 藤 静

枝

村誕子

島根県 野 醉

ライバルの会釈が熱い風となる

夢

新鮮な知らん顔して朝をでる 高知県

旭川市 倉 大 古 柏

笑 42

珠

高橋 垣 夢	高知県 赤 川 菊 野余りにも父の寝顔のだらしなさ 尾崎市 黒 川 紫 香妻の声色ていうならとんな色	想い出を探る深い記憶の底で 大阪市 橋 元 美 恵 大阪市 橋 元 美 恵	表にだけほめてもらった句を温め 島根県 堀 江 正 朗	た。東京東京の大学では、東京東京の大学では、東京の大学ではいいいいがでは、東京の大学では、東京の大学では、東京の大学では、アルーには、アルーには、アルーには、アルーには、アルーには、アルーには、アルーには、アルーには、アルーには、アルーには、アルーには、アルーには、アルーには、アルーには、アルーには、アルーには、アルーにはいいいにはいいにはいいいいいいにはいいいいいいにはいいいいいいにはいいいには、アルーには、アルーには、アルーには、アルーにはいいいにはいいいにはいいいいにはいいにはいいいにはいいいにはいいいにはい	済みませんの風情で濡れるてるてる坊主 米子市 休 伯 越 子虫けらにだって見上げる空がある	数一位	罪消しに北山杉の秋の道 軍田市 竹 内 勢 銅 観戦の陛下はメモをとる学者 山 本 規不風 のでではメモをとる学者	ケ 内 表
破天荒の野によく似合う彼岸花 豊中市 満 仲 きく子 豊中市 満 仲 きく子	端渓に父の素顔をみた臨池 赤 森 小雅子 大阪市 藤 森 小雅子	き 井 上 柳五	十年の歳月早し亡妻憶う ・ 一	一長龍着50~5日舎者1351 東原福子	雑兵の取柄どこでも飛んで行き はいという二字を解ってくれた子等 兵庫県 中 田 白 李	のは誰とだれ 兵庫県 野々口 ゆう也 兵庫県 野々口 ゆう也	倉 屋求 雅芽 洋	号未とも強未とも至う子がひとり
程別りの母は背中で返事する ・ 大阪市 北 勝 美 ・ 大阪市 北 勝 美	戦の列子供は掃けぬ優しさを 戦の列子供は掃けぬ優しさを 西宮市 野 呂 鵜 汀	にらみ鯛にらみ返して焼かれてる 松正市 豊 田 巡 歩 松正市 豊 田 巡 歩	は 打 [:	来年はぜひ菊作ろうと思う秋 東年はぜひ菊作ろうと思う秋 ヨーニー宅 ろ 亭	龍胆を野仏にあげ登山道 ※子市 菅 井 未 知	今年も無事姉妹が揃う父母の墓 中凡に生きて損した様に老け 山口県 高 崎 喜 一	中花セス木	*子市 小 西 雄 々

香りより舌で感じる日本人	若いママ開舌だけよ大安こ 大阪市 清 水 健 司	諮問会忘れ上手は通れます 東大阪市 竹 中 綾 珠	めくくる材	る出原敬	人間に支配されてる花の四季 寝屋川市 宮 尾 あいき	霊長類ヒト科でいやしき素浪人 素	之 	しつけ糸引く一すじに母の愛 田 静 佳	訪み終えた脳に引花が整々と呼ぎ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	廃釣の音なきままに夏は逝き ・ 水外・ 1・刺ニ、25×55・55・55・55・55・55・55・55・55・55・55・55・55	は一般的では一般である。 大阪市 江 城 修 史	が延にかはずに済んたけ気持する ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	別なことは、「ないでは、 ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	以中をよい号ではいるとなっ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	冷夏尾を引いて秋茄子つけぬまま
行 野	動めに出 !	妻の手にガスの焰は素直なり 太	矢 野 佳 雲	久家	晩年は売れぬてんのじ村でひそと逝き	現実と夢を教えてドラエモン	福山市 桑田 静子	方向を変えれば西瓜の蔓古れる 足鷲市 渡 辺 伊津志	ファミリーの減点パパでいる焦り 富田林市 中 村 優	中紫	[JU	退院野テ	大野武	あり 川 幸	宫
わらべうた子等に聞かせて亡母を呼ぶれらべうた子等に聞かせて亡母を呼ぶ り 見根県 栂 み ど り	生のこうでは、これでは、 一年和田市 古 野 ひ で	椅子ひとつ違って勝負はついている 幕士人	朝餉ヘコトコト一生終る気か 和泉市 西 岡 洛 酔	トンネルを抜けて我が家へ指を差し	潮騒とハミング瀬戸へ朝が来る 竹原市 古 谷 節 夫	通信簿母の溜息気にもせず 石垣花子	遠い娘の電話に父も寄ってくる	e F	ひと時の奢りに主婦の座を忘れ	戸美	立て膝の化粧に沁みた哀歓譜 本 多 洋 子	和歌山市 津 田 与 史	もう翔べぬ女残りの紅をひく	若柳	年寄りの知恵借りに来る娘の電話

柳 稿締切毎月末 界 展 望

(仏・喜見城選)、「神・路 「仏・喜見城選」、「神・路 「仏・喜見城選」、「神・路 「仏・喜見城選」、「神・路 「田柳」を「川柳」を「川柳」を「川柳」を「川柳路」、「日本日まで下窓」を「川柳」を「川柳」を「川柳」を「川柳」を「川柳」を「川柳」を「川柳路」、「神・路では、「神・路」を発行。「神・路」を発行。「神・路」を発行。「神・路」を発行。「神・路」を発行。「神・路」を発行。「神・路」を発行。「神・路」を発行。「神・路」を発行。「神・路」を発行。「神・路」を発行。「神・路」を表して、「神・路」を表して、「神・路」を発行。「神・路」を発行。「神・路」を発行。「神・路」を発行。「神・路」を表して、「神・路」を、「神・なり、「神・なり、「神・なり、「神・なり、「神・なり、「神・なり、「神・なり、「神・なり、「神・なり、「神・なり、「神・なり、「神・なり、

「彫る」 小材由多記 ・ 本題三句。 ・ 本郷三句。 ・ 本郷三句。 ・ 本本水客氏 (大阪市 ・ 9月22日から26日まで ・ るさと道東めぐり。 ・ 本二田一三夫氏のなり。 ・ 本二田一三夫氏のなり。

イた不■ スが二東 のアド iti バか

和句川

一月 閉

人田守乙16恒

名以口姫日例

編会町開分ス

正・■日銘■有多時■と9■とのて挙■集■一催日キ■

二氏

當柳

ひは

とり紋

+

\$85

月水な同注行本進日

た回総会

加山方松

大盛出として

陰進江

柳保0

正午。小松書 ■ 日 ・記念句会は ・記念句会は

原合諸洋村協

例会は祭品では、

会は終品加、行 11協掲藤小「

月替載貞林地 山由方

- 一期

市 は 加

向11碑

本月建

折 23 立

町日除 (祝春 Hit

競え虹舞面

河藤沢尼橋西 高尾

日明車之萬

選選選選選

選 選

久1る会川町月由は柳 `社 中 18 中央公民 左記五 要周 発館で 領年

高薫風寒介 () () () () 選介栞 選選

8月子宛。 8月子の。 42 邑久郡邑 27さん御 ○ (薬 –) (、 2 句。 (、 2 句。 (、 2 句。 久 合逝井 俊 . 掌去市 へ町真徳 ・〒70料 平皋陰 なさ 選田 于長狂

55 東 年11版 月川句 22 柳 会 日同案 (好内土会△ 6 時

と柳 研 献 全 を 発 は た 句 発 をなて、 集 *祭に選表 (岡山県) (岡山県) 究 年 記 造事念

1

0) 5

4 7

0) 7

斎大

14 東帯

阪

市向

141

央

館

ic 2 野一ペ盛3月川西一ツり丁20柳 15片場目日会 0) 4 6 5 4 不大時 の大 足萬 2 阪 金市

業

者

鉄川 辻南 5 見日 道柳 圭海4世6 七会 水鉄 2 物時 11 氏道南 K区結 高 K難果 経波 屋

田連 Ⅰ 兼行鉄八55 菜理新連兼55と南南文野連ろ兼松55南十新連兼東各2絡高題妻八尾年の部地絡題年同海海秋区絡ぐ 題崎年大四池絡題 年 大田11 で 電電 大田11 で 大田 下社月旬査の 和月 車境10会課12〒、20 3 〒遊丁 0 5 選西 西内日 3 2 8 尾 南西一 句高1應栞 幸郷月 選 吐杉八 福会一 鬼尾き 相館6 遊市つふ 五一時 氏中ねぐ 銀近

思思思思思枯忘蝶思思思燃思冷思忌青思思思思 い出は一人微笑む事がありい出は一人微笑む事がありい出が削減に沈む四季の里い出が削減に沈む四季の里い出が削めどもつきぬ古日記い出が酌めどもつきぬ古日記い出のSL広場で錆をつけい出のSL広場で錆をつけい出のSL広場で錆をつけい出のSL広場で錆をつけい出のSL広場で積をつけい出のSL広場で積をつけい出のSL広場で積をつけい出をたどればいくさに突き当りい出をたどればいくさに突き当りい出をたどればいくさに突き当りい出をたどればいくさに突き当りい出をたどればいくさに突き当りい出をたどればいくさに突き当りい出をからい出が出して、 れのいいいえいやいわ春いいいい にれ 10 出きれいな花 委ば 出 かけ越 、せて撰 本 0 道 が出 ひとりいて花 り分 来そう H り踏む 複義虹四一白大仕素文満洛博哲登右み胡掬亀八文 東京 東京郎路李柏雲郎平子酔友夫也近り子治甲銭

は水車におしい田のく為に

つ思い

偶思針思思

然い箱いい

然い相い出の出へ出の

出の母は血

思かいいや

いら出ま

出すたま

疼仮めた

き面てた

出つ老む

人会悪しい 温がどこ がと思いい 思かいに思

思

U

出

を

る

哀

VX

石

*

積

た地両

愛

哀

思

出

12

まも炎えてお

思

45

出

を

溜

80

陽

かい

沈

思

佐 伯 越 子 選

上きる女思いた夫婦思

C

に出泣

田ワル

思思未泣生青思夜風思思幸思消思思思片 春の世出出のい出のい出のい出のい出のい出のい出のい出のに、日本は出出の出の出の出出は出出の出い出出に出出るい出出の出い出い。 乙出出出出分 はきれい はきれい した夫婦 婦い あ出亡な仏出れ誰 思思に 一般で開けないで が出ばかり追う が出ばれている が出ばれているける が出ばして舞う では出がかかるとき がい出ばれているける では出ががかかるとき らば母恵 笑 しをに いなって らたに いさん年 い出 もにほも に原爆の人年取られましたい る 雨 L 桜のせめ うりるけむ忌女ず 日て貝音 七喜通里代道悠 優面 面山一風風男

峰

選

える . L 袋で渡った川の浮った人の 敵 へ 男の 浮き 沈 み で き 沈 み い き さ れ た 笹 浮き沈み で の で き 沈 み で き 沈 み で き 沈 み 向 う の 単 で さ れ た 笹 で き 沈 み 向 う の 岸 で で き 沈 み し て 父 今 マ チャンピオン明 マ チャンピオン明 で た み ト しけい胸 1) む む 柳 美彩喜弘美福春宵酔美操 子日明夢穂子 子 浮き沈みあなたにひかれて行く人、浮き沈みトンボが止る竿のとキャンピオン明日のことは判らな 浮浮浮濁浮浮七地浮浮吞浮底世濁浮 なを沈ねるプ 袋みみ みて 見 た女の 流れの あ幾 流 える つ度 n て人間え 過 去情れ 浮の間え ののに 木待のつ 主 苦沈 生先いいつ城舟ム道みみり髪み舟労み み勝一白三ろ里保洛胡酔春本七面 が り 美路李和亭風夫酔子夢日棒山 多賀子 七面

火

0)

恋

0

63

#

深

胸

積

む

思軸

題 吟

透く海に生活の海女が浮き沈み 勝負師の宿命と云う浮き沈み 草新を保守にかえてる浮き沈み 草新を保守にかえてる浮き沈み 淳き沈みするを見守る母であり 浮き沈みするを見守る母であり 浮き沈みするを見守る母であり 浮き沈みするを見守る母であり 浮き沈み下ラマは後編まだ続き 外車から軽四輪に乗り替える 外車から軽四輪に乗り替える がき沈み流れを変える堰もある うまが合うたばかりに妻と浮き沈み 空業を次の浮沈が待っている で業を次の浮沈が待っている でき沈み知らずほんぼん家を継ぎ 浮き沈みからずぼんぼん家を継ぎ 浮き沈みれたりではかりに妻と浮き沈み で業を次の浮沈が行っている で業を次の浮沈が行っている でき沈みからずばかりに妻と浮き沈み が待っている でき沈みからずばんぼん家を継ぎ でき沈みれたで変える 曜もある うまが合うたばかりに妻と浮き沈み がある。 で業を次の浮沈が行っている でまたみからではかりに妻とできれる でまたる。 でまたる。 でまたる。 できたみが、ことを できたみが、ことを できたいる。 できたいのでより。 できたいる。 できたい。 できたいる。 できたいる。 できたいる。 できたい。 できたい

課

元大臣敬称のない被告席明暗を分けた老舗の浮き沈み藁をも摑む手をもがれ神の所為だけではないはず浮き沈み神の所為だけではないはず浮き沈み てても沈む怖さを老は 知 ゆう也 哲夢〆

> 浮き沈み内助がタオル投げさせぬ どんたく

浮き沈みして人 情 0) 機 微 触 12 軒太楼

弘禎福悠越

朗三子泉子

浮 き沈 み先祖 0 家 訓 瞳 痛 10

代仕男

起 き る

素雅喜可健柳芳

石風酔住司子枝

日

河 村 選

實

綾句虹四掬勝 昧 珠地汀郎治一 腐起起煩歯若恙豆旅再起邯鯰起起 き上 1)小 りこぼし飾って二浪部 のように ヨガ学 屋 代仕男 WD 勝 越

照解の要さめ盛生起きあがり 起きるのは大儀と寝釈迦拝ませる 再起する友に貸す手を温める 旅立ちの朝の時計を進ませる を主きの朝の時計を進ませる がなく起きた我が家の倦怠期 をがなく起きた我が家の倦怠期 をがなく起きた我が家の倦怠期 を記される。 がなく起きた我が家の倦怠期 き上がる根性がほしきる日のあるを信じる のあるを信じる闘病記 親 本族棒 〆洋ひ喜 優 女 で酔 実家 7 吉 ばら

男酔女

っても

る再

四時にとび起きて始発へ踏むペダル

なんどでも起きるダルマを買うてくる陰口はきかない貌で起きてくる陰口はきかない貌で起きてくる底なしの沼で摂理を抱き起こし 夜を起きる雨があんまりひどいから早起きをしてもなんにもせぬ夫早起きの順に団地の窓があき朝起きの順に団地の窓があき もう起きたらしい厨の妻の音催促をされずに起きた朝の靴 爽やかに起きた日やる気充分で寝た子まで起こしねずみとり逃がし ゴルフへはびとりで起きて茶を沸かし年寄りの早起き嫁をいら立たせ ~ 朝爽 ン先が何を起こ 口はきかない貌で起きてくるを かん で 再起の 松葉 杖なしの沼で摂理を抱き起こし す か以下 彩はじめ 軒太楼 カズエ 素身郎 回天子 晚義 明

起新定一ラ 番後 1 きるのをじっと見守る子の育ち しい台本が待つ朝を起き年のまだとび起きる朝の性 オンが狩りを忘れ に起きて夜中の雨を云う 台本 た顔 で起き 武可 どんたく 勝一 美路 水住

う也

へ来て起きるタイミングに迷い 方

大

弾みをつ 起 き上 1) 胡

頹子

報

いのち長病みから起きる 操 7

Vi

47

步数室

恵二朗

って、自己の川柳の巾を扯げるヒントをつか場となり、新しい柳友を得るよき機会ともな む格好の場ともなるであろう。 柳の新しい流れを教えられたり、教えたりの 楽しくしのぎを削り合うよき道場となり、 さと、遠慮ない柳論風発の勉強会兼懇親会と なる長所を持っている 句会とがあることに気付くであろう。 中句会は、よきライバル達と相まみえて、 小句会の佳さは、膝を交えての車座 会を分析してみると小句会と中句会と大 無駄話多く本題入りかね

数の柳人が相寄るので、旧交を温め、 もさせてくれる。 イトを湧かせてくれるばかりか、数々の反省 級選者陣の厳選と取組むことが出来て、 を拡大するよきチャンスとなる。遠近から多 り交って、巾広い句材に遭遇し、 してみるよきチャンスでもある。 川柳交流の倖せを満喫できる。 また自己の個性をフルに発 句会遍路 健康を ファ A

> 折込みのチラシを無駄にしないメモ (会合の足並み時間を無駄にする

家計簿の赤字に無駄を探しだし (家計簿の赤から無駄を掘り起す (折込みを無駄にせぬ知恵メモに生き)

花鋏花木の無駄を剪って捨て (無駄剪って剪って師匠の花鋏

3. 2

長電話用事忘れて無駄ばかり

(無駄話用件忘れた長電話)

無駄足にさせずとうとう縁まとめ (きっちりと無駄なく姑の用簞笥 未 知

無駄の無い余生に楽しい旅が待ち (無駄足でなかった良縁結び上げ

(旅ごろも無駄なく生かそうわが余生 美

(無駄話多過ぎ本題見失い)

無駄省く暮しに迫る増税論 無駄のような趣味がようやく花咲か (無駄事と見られた趣味の花開き) せ

雷

少しの無駄があって家庭の灯が明い

[ii]

無駄骨と笑わば笑え春を待つ)

(少し無駄もあって茶の間の灯が温い)

ストレスも消えて楽しい無駄使い

13

(無駄使いする間ストレス消えていた)

句昧地

峰

ii

美

急用を知り知り長い無駄話 習慣のとりこになった無駄使い

無駄話さも忙しげに忙しげに

無駄口が叩ける男で捨て切れず 無駄骨を包む老父の作業ズボン

帆

雀

無駄口が叩ける男で味があり

味のある無駄口円座をなごませる)

n

姑の簞笥きっちり詰めて無駄がない

日曜の大工骨折り無駄になり

同

無駄話ストレス解消の特効薬

ストレスの解消大目に無駄話

保

夫

佐

仲人は無駄骨だけが多かった

明治の姑無駄を知らない手のさばき

日曜の大工無駄音派手にたて

(明治の姑無駄を知らない手足持ち

同

無駄足と思う敵地へ縋る票

胡頹

子

無駄骨は覚悟の上の仲人好き)

3

民宿の建増し冷夏に実らない

(無駄省く暮しゆるがす増税風

(民宿の建増し無駄にした冷夏

美

同勝

空気まで無駄に吸わない様な男

(空気だって無駄には吸わぬ男です

無駄話それでも楽しい老二人 無駄口の中から商魂のぞかせる

(無駄話それが嬉しい老い同士)

テ

無駄骨を折った男の軽い腰

無駄骨と笑われてもいい春を待つ はんぱ布手まめな母は無駄にせず

無駄足と思えど縋る敵地票

無駄口を先生怖い目で押え (無駄口へ先生の視線突き刺り

贅沢と無駄を吐き出す日日のゴミ 力分の一に無駄骨折ってみる 女です見栄のためなら無駄も買う

紀久子

同同

静

佳

鬼瓦 サングラス無駄な光線はねのける 無駄話しない職人光ってる 無駄のない男へ肩がこってくる 買物にちょっぴり無駄もあるゆとり 無駄口と見えるが交際上手なり 無駄な意地張る父の影うつろ見え 材料を無駄にせぬから出来冴える 条件をつけ赦しては無駄重ね 無駄話ちらほら本音がこぼれ落ち むなしさよ細る思いを無駄と知り 無駄球を投げて出方を待ってみる 無駄のない人今日も急ぎ足 (無駄口も交ぜて巧みな社交振り ここへ来て無駄でなかった老いの知恵 無駄口のない棟梁に委かせきり 無駄 (セールスの根気無駄足踏み続け 市場籠楽しい無駄もあるゆとり (無駄意地を張る老父の影あわれ 天高し細る思いを無駄と知り) 年輪が無駄でなかった老いの知恵 無駄知らぬ女で今日も急ぎ足 無駄な枝落せば庭木嬉々と笑む 無駄が次の打つ手を思案する ングラス無駄な光を選り分け 、駄じゃない魔除けですよと鬼瓦 無駄ではない魔除けなり ゲンでつい無駄使いして悔いる 足を踏んでセールス渉らず Ü のない話に個性のぞかせる のない職人の腕光る して庭木活きてくる 3 智津子 芳 同 同健 同静 柳 ī [II] 貞 武 īi [ii] 福 五郎 枝 和 枝 子. 代 太 7. 題一見栄 これ以上言うても無駄とのど仏 補装したあとからまたも掘り起し 無駄骨を折らせ最初の案が生き 無駄使いすなと昼酒のんでいる 無駄花もせめて色濃く咲いて散る 約束の小指が無駄を知っている たまさかの旅だ許 無駄を積む日々人生のひとこまか 乾杯へ下戸のコップもこぼれそう 無駄独楽を廻し続ける子煩悩 無理と無駄よけて長寿の円 無駄口を叩いて肚を探り合 無駄の中に 無駄な彩もあり人生のキャ 一つ小さい心の穴ふさぐ 口で憩う女の安上 駄 JII 柳塔 10 が次 11月20日締切 の煙でかくす の打つ手を考える 柳 1111

時代の 月 刊

男のロマン生きて いる 15 ス

点となり波紋ひろげる無駄話 無駄口の中で和解の種みつけ

い笑み

佐代子 三千代 同慶同瓢同露同寿同英同 武利同誠同 杖

岡山県倉敷市下津井 月号発表 一一九一三四 本 田

朗

送料 二百円

なたの 要求に応えて創刊 諷 刺が日 JII. 日本を変える投資 代 稿 募 集

A5判180頁定価一〇〇〇円 叢文社

刊

結集して文明の誤りを矯正改した「英知の凝結」である。 者は失格である。 ①凝結された市民の英知 た「英知の凝結」である。この英知を習は失格である。川柳は市民の眼が洞察とされるものでないことを知らない指導しきれるものでないことを知らない指導し、ものごとの本質を見抜く。到底だま 、ものごとの本質を見抜く。常に冷静な市民の眼は、理と 川柳時 文明の改革矯 は目ざ 改革する力と 理くつを越え IE

する。川柳人口の拡大は、民主主義の強であった。民主主義と川柳の根底は一致であった。民主主義と川柳の根底は一致であった。民主主義と川柳の根底は一致にある。支配者に向って放つ批判の矢弾に入り、大学に対して 化に通じる。

彦

2

柳

口を拡大して

したい。

③頭の体操、頭の老化防止に—— ③頭の体操、頭の老化防止に—— るのか、川柳人には健康長寿者が不思議 本質を深く洞察し、限られた文字で諷 を関いた。

振電替 東京都千代田 東京 \Box 座 区猿楽町 東 元五二 京 九 〇 五九丁 01 四七一 四久松ビル 匹番

大 萬 JII 柳

ほどほど 入選発表

投句総数 三百六十四 村 旬 郎

Ŧi. 旬

サイフにも胃にも手ごころを云い聞かせ

ほどほどに出来ぬ血の気が多すぎて ほどほどに飲まして帰す好きな客 下 ほどほどに嫉いて手綱の締め加減 ほどほどの酔いが祝宴盛り上げる 鳥取露杖

都桐

ほどほどで手を打ったのが今の妻 和歌山 和 子

ほどほどの距離がきれいに見せる恋

京 都 規不風

ほどほどにせよが年寄り気に入らず

岡 山 千代香

祝宴をほどほどにして旅立たせ

和歌山 武 雄

ほどほどの両隣にて仲がよし

ほどほどに飲んで出番の黒田節

高田林

ほどほどにとぼけて肚を見せぬ姑

千万子

和歌山 寿

なお慕いほどほどなんて通じない

男

ほどほどで満足出来ぬ自尊心

ほどほどのとこで女は諦める ほどほどの愛で繋いだ糸切れず ほどほどの雨 富田林 花

招かざる客ほどほどにあしらわれ

東大阪 綾 珠

ほどほどの世話も君への思いやり

ほどほどに叱る母には背かれぬ ほどほどの縁で仕度も気が軽い ほどほどの夫婦で路地の灯がぬくい ほどほどにとぼけて嫁と丸く生き

病床でほどほどの価値考える ほどほどに強気もみせて寡婦孤独

ほどほどがままにならない凡人で

面一本杉

和泉東天紅

何事もほどほど妻に論される

ほどほどで決着会議早くすみ

ほどほどという御祝にまだ迷い 今 治 胡顏子

見えすいた世辞ほどほどに聞き流し

ほどほどに飲んで美しい夢に酔い 老いの愚痴ほどほどにして聞き流す 大阪武太

ほどほどに自慢話をきいてやり

ほどほどに見せかけ関志燃やしてる ほどほどのつき合い周囲も丸くすみ 和歌山頼

幸せな音がする

反対もほどほど本音ちらつかせ

子を思う鞭にほどほどなどはない

ほどほどの暮しへ感謝夕餉時

軍拡もほどほどにせよ総理殿

ほどほどに聞いて仲裁して帰り

ほどほどに勤め出世は当てにせず ほどほどに暮して借りも貸しもなし ギャンブルの魔力ほどほどにはさせず ほどほどの刺激がほしい老いた日も

ほどほどの酒を明日の糧とする ほどほどの生活に和む凡夫婦

ほどほどに妬いて妬かれて五十年 和歌山

長生きもほどほどでよいと思う日も ほどほどの距離を詰めてはならぬ仲

ほどほどにせいと達磨の目が論し 地ノ句 阪

ほどほどの距離で見守る子の育ち 天ノ句 大阪

ほどほどの付き合いに変えもう貸さず ほどほどに逢うて炎を絶やさない 選者吟

昭和五十五年度

雄 好 寿 和 タ 化 ベストテン マ ー 子 子 花 梢 トテン ニニ 三 三 四 五 六 ン 五五五 (九月現

五四

三三

三四五五五 大和和歌山山 富田 度右道軒頼吐武太太 近子楼次来雄

九九〇〇〇〇 〇五〇〇〇五

寝守大大和羽和 聚曳歌 川口阪田山野山

満津子

昭和五十五年最終回

和五

ていたが、六月号に入院3句とあったので病 一病が重過ぎて」とあったので、一寸気にし

締切 十一月二十日

W

藤井一二三方 大萬川柳係

投句先

以 岡 大 下 山 阪

出直し 士 月二十日

三句以内

すからご注意の上厳守して下さい ・締切日を毎月二十日に変更しま 好郎

堺市堀上緑町 一二二一

あった。よい意味の大阪弁の良さを身につけ られた人であったように思う。 昨年十一月頃、私方の店の前を通られ、こ

全くない、奥様タイプの至って庶民的な方で

であった。よい川柳人をまた一人失った。身 と十五分ほど世間話をして帰られたのが最後 盛大な葬儀があり、故人の遺徳を沁々と偲ぶ 辺寂莫の感が深い。九月六日、長居臨南寺で の附近まで来たので市場へ廻って帰りまっさ

志その他の川柳人の顔も散見した。

院や医療関係の人々が大半であったが、 にふさわしい立派なものであった。元より病

栄、宏子等々百花燎乱

しまれる秋吹く風も間にあわず

松園

太田良子句抄

貧乏はいといませんと云うたけど 電話口吞んでいるとも云えぬなり 拗ねてみて脈のあるのを確かめる 美しく見せる仕ぐさを娘は覚え

田良子さん逝く 1 松 園

今の人達には話題に上らなかったが、なかな や薄れて、近来は句会でもあまり見かけず昨 だった面影は川柳塔同人になられてからはや か真のある良い句を詠まれておられ の太田良子さんが亡くなった。嘗ての活動的 柳雑誌社婦人友の会の会員で古

嬉しく感じたが、その一句に「一病息災その を見つけて川柳を忘れておられなかったのを 今年四月号川柳塔同人吟に久し振りに名前

111 柳人 時代を現出した。 流作家として葭乃女史の婦人友の会のグルー 石、阿茶、操子、一 プで錚々たるメンバーの一人として当時の小

川柳に興味を覚えられたのだろう。

その後女

川春巣、市場没食子等々の川柳家がいたので 病院には川柳部があり路郎先生指導の下に北 業後、大阪逓信病院へ勤務、

当時の大阪逓信 関西医大眼科卒 恵まれた生涯を終えられた。

大正十二年福岡県に生れ、

肝臓腫瘍が因であった。多芸多趣味な倖 院生活を知ったが遂に不帰の客となられた。

三十四年、医学博士の学位を得られた。しか今日まで信用の高い名声を得られた。その間でヲポーニー し良子さんからは女医博士というイメージは で夫君と共に開業医として地域の診療に従事、 その後倖せな結婚生活に入られ、東住吉区



島 宗 55年度第 居 1 回移動同人総会 \exists

会場は一段と賑やかになった。 如く温く迎え入れて下され、 集まっており、知った顔は勿 敷には既に大勢の地元柳友が に到着した。宍道湖畔の大座 削に会場の松江温泉、 決適なドライブで午後三時 初対面の人々も皆旧友の 神の湯

つ事が出来ましたことは私共にとって極めて

実現されることになった。 ぼっていたのが、 でも開催したら…と話題にの 懇親をかねて順次地方に於て の間で、同人総会をときには 子てから、 今回初めて

総会出席者は地元組

旅に発った。中国縦貫ハイウ 名が和気藹々と借切りバスで 用する三名を別にして二十六 欠員があったが、汽車便を利 もない。 ら雨は上り、 ェイを岡山県下に入った頃か 頭初の申込み人員より若干の 降り続いている雨は止みそう 八時三十分松江へ向け一泊の 九月二十七日、二日前から 子期せぬ事情のため 青空が覗いてき

本社膝元の同人 等も既に到着しており、 汽車便組の三名に竹原から駈けつけた静水氏 を加えて七十九名である

園氏の閉会の辞を以て総会は滞りなく終了し 熱意ある発言が交され、 **栞副理事長が左記の通り披露され盛大な拍手** されたのが少し残念ではあったが、これに代 であるが、生々庵主幹が健康上の都合で欠席 で迎えられた。 る挨拶のメッセージがよせられているのを、 最後に質疑応答にいり、 総会は定時に開かれ、式次第は既報の通り 議事は全て終り小松 塔社の発展を願う

■生々庵理事長のメッセージ

御挨拶申上げます。

解と絶大なご協力とによって盛大な総会を持 地区を中心とした同朋柳社ご一 りました。考えてみますと、 義で且つ記念すべき第一歩を踏み出す事にな 深い錦地に開くことに決定、 詮衡の末、その第一回移動総会を大変ゆかり ることが出来る、 以外の地域に於ても移動総会として、 議の結果、 川柳塔本社常任理事会は先般いろいろと協 本社の定例同人年次総会を大阪市 という決議を致しました。 このたびの松江 本日極めて有意 同の深いご理 開催す

ます。 めて、 地域とバトンタッチし、 欣快にたえず、ご同慶の至りに存じます。こ からお願いするものであります。 て行きたいと心から念願してやみません。 の第一回移動総会の成功は永く忘れ得ない感 し川柳塔をご支援、 どうぞ、この上とも私達の川柳塔を愛 燃えあがるこの焰を次の地域から次の 錦地の関係の皆様に厚くお礼を申上げ お導き下さいますよう心 漸次、 開花育成さし

止むなきに至り、まことに申訳けなく、 点もあり、 りますものの、長途の旅行に今一つ懸念する 折も折とて、不肖私事、今春より些か健康 今日では殆ど全快に近い状態ではあ 且つ周囲のすすめもあって欠席の まこ

ご健康を祈念し乍ら、 会を瞼に描き、 事長が揃って出席致し諸般の報告なり 本多久志、 とに残念至極であります。幸いにも若 て不肖私の我がままをお許し下さいま の上ない倖せに存じます。それに免じ 一協議なり、 いよう勝手ながらお願い申上げます。 緒に忌憚なくお話し合えることはこ 今は遠く離れた大阪から遙かにご必 西尾栞、川村好郎の三副理 お願いなり、 そして皆様のご多幸と お詫び旁々ご挨 を皆様とご

拶と致します。

ソード等、 選者が兼題の選句をする間を好郎氏が 述べられ、 NHK川柳の選者として接した感動的なエピ 小話」と題して、敬老会会場で目撃した挿話 柳話が終ると、いよいよ選句の発表である。 総会に 引き続いて句会に移るのであるが 教訓に富んだ洵に有意義な講話を 満場に深い感銘を与えられた。 川柳

各題の秀句ならびに軸吟 野村 太茂津 選

軸国境の橋に嗤われている敵味方 厌橋架けて川が人間臭くなる 地ふん切りをつけさす長い長い橋 以吊り橋が揺れる企みが揺れる
 みずほ
寿美子 ŗ.



川村好郎副理事長

軸宍道湖の名陽にとける出雲弁

西尾 栞 選

軸生け作り日本海の波の音 (天美味しうですこし哀しい活作り 地兄嫁は島の生まれの活作り (人活作り青磁の皿に海があり 満津子 寿 馬 12

漁り火 木 千 代 選

因漁火に戻らぬ父の墓がある 地漁火よ防人たちを呼びもどせ (八漁火に鵜匠の鼻の高き影 雀踊子 寿

汀 馬

軸いさり火にとどかぬ闇に月見草 縁結び 河 B 満

人縁組みが決まり追われる習いごと 軸嘘つきの方が上手な縁結び 厌家柄と愛 天秤にもめ続け 地カセットの祝詞で軽く結びつけ 代仕男 Ĥ 選 朗 T

(円活字ではさまにならない出雲弁 地その上に入歯がたつく出雲弁 (八恋進む大阪弁と出雲弁 出雲弁 尼 緑 之 助 小松園 右 選 近

の奇術に地元組の賛嘆の拍手が高い。 親睦の盃を酌み交わす。ベテラン村田瓢太氏 最後の仕上げの懇親宴となる。地元組、大阪 嘆声、 それぞれ適当に入り交じって卓を囲み、 笑声、拍手喝釆のなかに句会も終了。

親宴をお開きにした。

泊するという、感激のほかはない。 大阪組はそれぞれ割当ての部屋に引揚げ旅 大阪組はそれぞれ割当ての部屋に引揚げ旅

八時から宿泊組を中心に晩餐をかねての第二次宴が開かれた。珍味の膳もさることながら舞台の幕が開かれた。珍味の膳もさることながら大されて演じ大喝来を浴びた。地元幹事のたこなしで演じ大喝来を浴びた。地元幹事のたこなしで演じ大喝来を浴びた。地元幹事のたこなしで演じ大喝来を浴びた。地元幹事のたこなしで演じ大喝来を浴びた。地元幹事のたこなしでは明とともに、神の湯の趣向をこらし心のこもったサービスに一同は感激し大満悦であった。またの機会があれば再びこの神の湯を利用したい、と誰もがもらしていた。数をつくしてお開きの後は、米子婦人連の心づくしの御点前で満腹の胃を潔め、思い残しのない一日の幕をひいて安らかな眠りに就たった。

つけて来た。その熱意に頭が下がる思いだ。早朝、大阪から岳人氏が遅ればせながら駈け

本の場を九時に出発して市内観光の途についた。武家屋敷の通りを経て、田部美術館、小た。武家屋敷の通りを経て、田部美術館、小た。武家屋敷の通りを経て、田部美術館、小神の湯を九時に出発して市内観光の途につい神の湯を九時に出発して市内観光の途につい神の湯を九時に出発して市内観光の途につい神の湯を九時に出発して市内観光の途につい神の湯を九時に出発して市内観光の途につい

米子駅前で遅い昼食をとって、ここで同行

川柳塔社常任理事会(10月2日)

■生々庵主幹より、不二田一三夫氏入院加療 中の今村病院の現況、並びに栞氏より、病状

■栞氏より主幹へ、松江同人総会の模様につべられた。(次記事項中に含む)

■本社創立十五周年内祝の件 日時 56年1月15日祝PM 日時 56年1月15日祝PM

案は決定次第発表。 5周年を記念し、支部の認可を行う。 具体

・支部設立の件

・岡崎祥月氏療養のため同人辞退。

したがっ

願ってやまない次第である。 益々開華し実を結んでいくことを、ひとしく 益々開華し実を結んでいくことを、ひとしく て、思い出に残る山陰を後に一路帰阪の道をの地元組と名残り惜しい訣れの握手を交わし

後任参事を決定する。地区同人と相談の上、事を決定する要あり。地区同人と相談の上、て参事空席となる。早急に松江地区の後任参

■広告費の件

■感謝状贈呈の件

いた本田恵二朗氏に感謝の意を表す。 講座(本誌)を10年の長期にわたりご尽力戴 がなる行事の一環として、初心者指導

■同人間の連絡事項伝達の件

部で試案提出のこと)

部で試案提出のこと)

部で試案提出のこと)

部で試案提出のこと)

花・岳人・小松園・薫風・酔々。 (酔々) 太・庸佑・柳宏子・与呂志・紫香・萬的・潮 出席―生々庵・好郎・栞・水客・形水・瓢

小出智子。後列右から―鷹元美恵、見川前列右から―野田素身郎、生々庵主幹、 与呂志の皆さん ・出智子。後列右から|橋元美恵、児島



気味の中でマイクも不調、司会柳宏子の声も 氏の顔も見え賑やかだが、 句会初出席の武太氏、珍しい花村氏や、 のため駈けつけた素身郎氏、美恵さんや本社 表句会とあってボルテージも上り気味。 に一三夫氏の顔が見えないのが淋しい。 先般の松江での同人総会の余波もあり興奮 雨雲が残り蒸し暑い会場は、 会場後方の指定席 55年度 受賞 賞発

不調が興をそぎ申訳なく思われた。

55年度一 一賞発 表句会

本社 月 句 会

会場 金 属 会 館

午 後 六 時

ては路郎賞に移る。喜びを体一杯に与呂志氏か代表して大阪の橋元美恵さんの受賞、続い を浴びていた。月間賞は江口 クライマックスに達す。 淡々とした素身郎氏、緊張気味の智子さんで 子さんと竹原の寛子さんの欠席は残念でした なる。川柳塔賞は本年該当作品なしと些か淋 しかったが、準優秀作女性三人、出雲の多賀 続いて句会も受賞者の句が続々入選、拍手 生々庵氏の挨拶のあといよいよ二賞表彰に 度氏に輝く。

進行-柳宏子·記録-鬼遊 受付—与呂志・敏・重人 柳宏子記

好郎・岳人・史好 瓢太・庸佑・頂留子・萬的・みずほ・三十四 武太・糸葉・好一・右近・吸江・生々庵・度 紫香・としよ・白宗・道子・満津子・美恵・ ·小雅子·規不風 ·千代三·凡九郎·幸生·花村·桐下·山久 武雄・きみ・文秋・洋敏・君子・鬼遊・翠光 ・形水・酔々・夕花・善紫・柳宏子・悦郎・ ・健司・素身郎・雅風・水客・柳伸・潮花・ 柳杣・勝美・重人・憲祐・千万子・滋雀・ 与呂志・薫風・あいき・幸太郎 ・
寿子・栞・
雀踊子・凉 ・智子・英王子・美乙女・

席題 種

·小路·小松園

野田 素身郎

陽のめぐみこぼれ種をも見逃がさず 引出しで不運をかこつ花の種 生真面目な顔で笑いの種を撒く 蒔きおわるまで鴉鳴かないことにする 栞 花の種女はみんな美しい 沈黙を破る話の種がない 種袋全く違った彩で咲き 丁万丁 選 祐 雀



郊外に住みダイコンの種を撒く 善人がまくとスクスク仲びる種 種袋の写真程には咲かぬ花 人間の知恵種なし西瓜とはあわれ おとなりの種が来たのか同じ花 立ち読みでひろう話の種ひとつ 偽善者の種はきれいな衣着る つす蒔きにせよと母から添え手紙 師の種はきわどいとこで消え 運命託す花の種

生武 小洋柳 文右 路敏伸

与重 紫 人 香 千代三 近極 秋

春を夢みて亡母

が遺した花の種

の肌種はだんだん知ってくる

結局は親の血を継ぐ種になる

の日

母 から届

0 種

心配の 種馬の或る日の夢の菊花賞 種ならいつも持ってい

平仮名の上手な母の種袋 左遷の地へ蒔こうと思う花の バラの横だから蒔く種考える かた想い片手に重い花の種 断崖が種をつかんで離さない 大輪の種に今年もだまされ 種

背くかも知れない種に水をやるたんぽぽの種風の運んだままに生き 戦争の火種が見えて女児を生む ゴミ箱の横で芽を出す種もある い物の種が負けない花をつけ かぬ種が生えた舗装の割れ目から 紫瓢

素身郎

小 出 智 子 選

月夜道哀しい過去が追うてくる お巡りも僕もびっくりした夜道 嘘聞いてやるのに丁度よい夜道 い訳を考えてるうち着く夜道

白素潮酢宗郎花々

潮醉

口説かれる覚悟は決めている夜道 或る時の自分を歩かせてみる夜道 れないで帰る夜道へ降る時雨

足音がも一人ついてくる夜道

し声大きくなってきた夜道

夜道ゆく後や先やに亡母の影 夜道ふと自分の影に話しかけ

石焼芋の笛が夜道をあたためる

小桐 白 雅 下 宗

妻となる女と歩調の合う夜道

桐 君 君道寿紫小凉君 子子子香路 一子生下

ました。お詫び致します。

へ月が見えかくれ

西田柳宏子・塩満敏の両氏が洩 月号掲載の55年度本社句会全出席者

れて

千万子 栞

杣香太花 恋をして夜道のよさを知りはじめ 街の灯がそろそろ橋筋らしくなり 捨て猫に呼びとめられている夜道 浮き浮きと歩けば月が従いてくる 東大出夜道のこわさ知らなんだ 傷心の夜道 木犀の夜道で裏切り考える 老妻が夜道へそっと腕組みに 肩の手を誰も咎めぬ夜の道 間をやさしくさせる夜の道

夕生紫水萬 花庵香客的

客的

良心が無事に夜道を通り抜け 仲良しの野良犬がいる夜道 仲秋の夜道は狸も歩いてる 婚約をしてから夜道が怖くなり 暗に眼が馴れて妥協の道帰る 残業の駅で待っててくれた父 夜道から夜道を歩く職に生き 防犯ベルしかと握っている夜道 夜の道私の影が背伸びする

素身郎 智 としよ 度

洋

高 薫

題

訣別の夜道に恐いものがなし 単身赴任急ぐことなどない夜道 夜道ふと背広のボタンはめ直す

ばあちゃんとねんねと枕だいて来る 風 選

頂留子

チャンコの枕で目下ひとり者

憲

悦小あい 郎路き

手枕のしびれに添え乳目をさます 水枕仕事のこともさりながら 旅枕さめたら雨が降っている 何んとなくに枕のカバー替えておく 手枕のむっくり起きて去に支度 泣きごとも痴話もあきあきする枕 ドヤ街の枕はしあわせかも知れ 気の強い女の枕ぬれている 家出する気配枕は知って居た 戎橋渡ると枕売っていた 善人は低い枕が大好きで 枕木のひとつひとつが耐えている ラブレター枕詞に惚れている 枕木に秋風佗し飛行雲 寝付かれぬ枕に魔法がかけてある 放心の手枕テレビは唄ってる 星が降る岩を枕に露天風呂 箱枕明治女の恋と意地 からくりの木枕飛驒の血が通う 如 **千万子** 太弘静津生馬

鬼右岳重美洋勝白

じっくりともう来年の

プラン練る

コンセント外して冬眠したくなる

梢

諍うた夜も枕が二つある 定年の首の軽さを知る枕

手枕で男は

天下取って見る

やわらかい枕に義理がうすれ行く 燕

菊沢 小松園

じっくりと見れば鍍金が剝げている 飛車捨てる手はじっくりと考える 定退にじっくり人生見直され じっくりと相談に乗る長火鉢 じっくりと構えて的を誤たず じっくりとテープで聞いた秋の虫 じっくりと診る聴診器がこわい じっくりの二人でぬるいお茶啜る どんたく 満津子 文弘みず 平生ほ

じっくりと磨けば瓦なりの艶 じっくりと見ればさほどでない美人 じっくりと話せばとけるわだかまり じっくりと論すを爪を嚙んで聞く 急所には触れずじっくり戒める 雑音をじっくり聞いているゆとり じっくりと考えぼたんかけ違え 智滋鬼好右 太茂津 柳宏子 度 子雀游

凉みずほ

きみ

素身郎

生々庵

小松園

好史

郎好

じっくりと一本の樹を描きはじめ

枕頭の夜のしじまの痰コップ その時は妻枕頭にきっと居る

老い二人なんの話もない枕 転々と職を替って来た枕 妻や子とたまの対話は枕もと ゆさぶればなお炎えるものある枕 化嫁に枕カバーは白すぎる 枕抱く男世間は甘くない 箸枕代理のおとこに無視される 寝がえりのたびに枕をかかえ込み

一つもって枕を高く寝る

じっくりと女の嘘を聞いてやる じっくりと構え打つ手は打ってある じっくりしてる訳ではないが嫁き遅れ じっくりと歩こう秋の城下町 じっくりと根廻しをして騙される じっくりと女に選ぶみやげ物 うろ覚えじっくり聞かれうろたえる

みずほ

青玲社南青会日本画

智雀踊子ほ

3F文化サロンオオタ (東区北浜2丁目) 品展が十月十六日から三十一日まで河富ビル (入場無料 原玉青先生主宰の青玲社南青会々員の作

風

じっくりと己見つめる旅に出る 鉾先がじっくりこっち向いて来る じっくりと聞かないうちに怒りは じっくりと仰げば仁王の温かさ じっくりと口紅おとす自信持つ じっくりと廻る水車のひとりごと じっくりと馬鹿な言葉をあたためる 生きて行く嘘をじっくり考える じっくりとかかってこいと受けて立つ じっくりと治すつもりで外科を避け 1) 凉水 雀踊子 佑杣

うなずいて帰り女房に背を押され 題巻き返し JII 村 好

黒幕をチラチラさせる巻き返し ジンクスを信じて賭ける巻き返 後手後手にまわる過信の巻き返 巻き返しの怨念背負う平家蟹 巻き返し手ぐすね引いて待つ煙草 巻き返すキップは片道だけを買う 巻き返し計る意地だけ持っている 巻き返す意欲忘れた吹きだまり 巻き返しはきかず冷夏のままに秋 巻き返し和解の笑顔用意する 巻き返し計算に入れ策を立て 柳君萬潮紫重悦 子的花香人郎佑梢

水酔みずほ

はたらくうた △追

大 道 美 Z 女

巻き返

し八百長臭いチョップ出る

カンナ屑ポンと払ってお茶にする 初孫へ老の稼ぎに出る励み 子はみんな大学出した寡婦の意地 寡婦の意地汚れた物は着せてない いた汗が知ってるコップ酒

者との交際は許さぬ家風であると、近所の も葉も絶って嫁いだのだから実家や縁 結果を報告させ、 、新聞 笑顔 P.

まき返

し手紙の封は切らぬまま

しの気まま、病身ではあるが趣味の明けく だ今おそまきの青春でございます。独り暮 を取り戻し、川柳へのご縁をいただき、た 圧二六〇という状態ですませ、ホッと自分 見せぬ恐ろしい毎日でした。 人に感謝し余生を大切に生きたいと願って いつけ、帰宅後、 読む必要なしと、朝個条書にして用事を云 交際もさせず、女は家事に専念し、 昭和五十年六月ガンで死亡。三回忌を血 大変倖せな毎日です。倖せな日々を主

> 巻き返す意地を試してみる罵倒 巻き返す荒波空しさ知って 沖縄も当る市場の巻き返し 巻き返し六法全書握りしめ 山彦となる巻返しはかる声 まき返し五黄の寅の男です 巻き返し一矢報いる目に出合う 本の主義を通した巻き返し いる

巻き返しなんでこんなに遠い 母の忌や走馬灯を巻き返す 巻き返す選挙へサラのダルマ買う 巻き返す気は気でも芯が錆び 巻き返し覚悟の上の正義感 背水の陣を敷いてる巻き返し 保護色のなかで女は巻き返す 巻き返す言葉はいつも持つ妻で 巻き返し挑む手許に駒がない す非理法権天の旗の風 し計る女のふくみ針 道 水

雀踊子 " 司子的 馬江秋客近

好智郎子

巻き返しなだめる役も怒り出し 西 尾

題

見え透いた嘘も笑って聞くゆとり休日の刑事が和服着るゆとり 指切りの掟に虹を見たゆとりゆとりでき夫婦に危機がおとずれる 質屋通い昔話にするゆとり 我が家にも少しゆとりの熱帯魚 素身郎 梢 好右みず 近ほ子

人妻になってゆとりのある言葉

姉芸者デザート食べているゆとり 挑戦状の誤字をなおしているゆとり

高杉鬼遊

出来て来たゆとり陰口気にしない

コネのあるゆとり列を競わない ゆとりからくる男と女にある不安

ゆとりもつ時間へ少しさばをよみ

小小武酔 雅松 子園雄々 としよ

ゆとりある歩巾明日を信じ切り 八雲立つ風土記の丘に佇つゆとり 妻の座のゆとりで観てるメロドラマ 泣きごとの中にゆとりが隠される ゆとり出来優しい顔になりました 預金帳も一つ持っているゆとり ゆとりある言葉が過去を消してゆき ゆとりもちすぎてスタートけつまずき 仏壇へやっとゆとりの灯をともす 三分のゆとりが欲しい朝の膳 いゆとりを持てよ蟻の列

実益の趣味はゆとりの仮面もつ成り金のゆとりは庭に川がある 披露宴父のゆとりを見てもらい 岩風呂で星を数えているゆとり ゆとり出来るまで松茸は食わずお 晩年の多趣味をゆとりかと思い 看病のゆとり出て来た虫の声 咳一つゆとりを見せて祝辞すみ 切り札を温存してるというゆとり 銀行の帰りに画廊へ寄っている 雀文善き弘京弥規酔庸智好酔み勝美み柳柳桐幸好萬 踊 子平紫み生一生風々佑子郎々ほ美恵ほ伸子下生一的

本を買うゆとりぐらいは言わずおく 小水憲白 松 園客祐宗 栞 度



▼かならず原稿用 締切毎月末着便まで。 紙にペン書きで文字は 21行以内。

七字以内の句に、下三マスに雅号。 柳たけはら

天の川わたし舟でもあったなら ああおいしいむぎ茶は夏の味がする ベットではなつけぬ合宿一日目 球ひろいバイバイラケット買いかえる 焼酎に負けた男がからみつく 生かされてお陰と思うことばかり ひそと住むいずれ劣らぬかきつばた

弱虫めひとりぼっちになりたがる 締切に追われてばかりの人生か 保護色をまとい戦うことをせず 老いたまう母ちぐはぐな耳となり 初入選なんとも気分晴れてくる 花ばさみ朝のポエムが生まれそう デュエットで歌う夫婦がうらやまし 花芯へひびき女なさけに崩れゆく

不鈍寬節

停電へ人間だけがうろたえる

制服がじっと押えた腹の虫

落選へ投じた票に悔いがなし

本の煙草がほしくペタル踏む

変骨が一番まともな事を云う

逆境へ趣味が支えて呉れた花 多趣味だが無芸で宴会黙りこむ 嫁ぐとの伝え瞑してボート漕ぐ 履歴書に無難な趣味を書き添える 趣味合って緊張解けた見合の座 趣味がよく顔も可愛いが丙午 沖に出たボート二人の世界です 習いごとみんな趣味とはかぎら コメに字を刻む趣味あり背を丸め ボート揺れ二人の愛は揺るがな いつまでも夢を乗せてる貸しボ

光フクヨ

牧場の絵ハガキが来たアルバイト サボッたらそれだけになる歩合制 ライバルが励みのリズムつけてくれ もめごとをさぐると女につきあたり 仲人がやんわり迫るいい話 変骨が売り物料子屋ようはやり 駒つなぎ川柳会 恒報

子川

人間を敵にぼうふら泳いでる

弥山人

夏休みけれど気になるつうしんぼ 水遊びびちゃびちゃあとで叱られる

希世子

変骨も孫には別の顔を持ち 変骨に飼い大迄が似て吠えず 変骨の筆にコケシの目が生きる 変骨に頼んだ仕事はかどらず お互いに多少変骨だと認め んくつを捨てると俺に何もない

変骨な父でも唄う夜がある 変骨に一つ覚えの唄があり

柳宏子

このチャンスボートの中でプロポー

句

中筋

動揺が隠せずボートのゆれ誘う

お見合の趣味の一致が縁となる

宣恭五周裕

先生とボ

嚙みついたあとさすり合う痴話げんか 旦さんに大が嚙みつく二号邸 失言に総理すかさず嚙みつかれ PTA一人嚙みつくのがもめさせる 人をみな燕雀にして孤高たり 東大阪川柳同好会 斎藤三十四報

三十四

慶

山の子にはじめて海のひろびろと 空と海一つになって点と消え 広々とした海原に出た不安 嚙みついた女の愛を憎めない 嚙みついたチャックへ迫る発車ベル 千弘 儀 勝代三生一美

雀踊子

知文隆光

厘 史

湯上りのパパを待っている花火 流れ星だけが動いた落し穴 湯上りの胸毛へ持っているビール 湯上りの浴衣に日本の夏がある

田月

嚙みついて間違いだった間の悪さ 七人の敵などぼうふら持っていず ぼうふらの時は血の味まだ知らず ぼうふらの恋を見ている水中花 いきることのみ多き流れ星 柳ささやま

欠点がこめかみに出て出世せず 河原みのる報

小雅子 ひか平 小松園

59

与可和

住むとこは古都君は君らしく

ひらめきへ作家無言で瞳をつむり

本番が近づきあやしくなる自信

へ過去をあづける浜に佇つ

顔うめて泣く古里に母があり 香水が極暑の路地を通り抜け 縄のれん誘った友が先に酔い 雨降ろと止もうと雨の勝手です

手の指に光るものなし農に生き 親指で拭う涙に嘘はない 後ろ指さされ

ぬ寡婦で地味幕

伊藤ゆかり小指嚙ませてヒットする去年着た踊りゆかたを病床で撫で 定年へこれからタクトなき踊り

みのる

1)

れた子がね

冷房へクシャンクシャンの返事する 冷房がきつく風呂敷ひざにかけ 踊り子の和にとけ込んだ月丸く

> くにの 五千代子

靖

冷房も過ぎれば老人身にこたえ

京都塔の会

松川

性的報

ラの棘も胡瓜のとげもいとおしく

美

荒れ模様夜釣りは出たし波怖し 柏秋大永越実

核家族西瓜一つをもてあまし 近道を行けば石あり水溜り 女名ののれんくぐれば亭王あり

立ひざで女マニキュア塗っている 菜の花句会 鬼遊報

応援はするがと金は出さぬ肚 スタミナがついたと思う試し斬りくつろぎの古都も国賓とり巻かれ 大原女が頭で運ぶ白い秋 プライバシー覗いて作家わるびれず 4 頂留子 幸昭酔

雨あしを見ている旅がしたくなる

いい返事してから腹の立つ弱気

人居る部屋に一人の風があり

針生姜残りの酒を集めさせ 夏雲を切って長刀辻回る 家元の浴衣へ締めて出る博多

伊藤律やがて作家になるだろう

糸岳

葉

栞

お伽噺 身一つを運んで今宵妻になる どんぐりが落ちたいときに落ちる古都 負けている方を応援したくなる 織田作が踏んだ落葉の坂下る の中にもあやしいとこがある

ほうれん草ポパイのようにいくか知ら お茶漬に古都の香りの音を嚙む 応援に行ったら酒がのめそうで スタミナのもとは愛妻弁当です 蟻よ運べ運べやがて冬の音がくる ひと前で泣かぬ女で古都へ来る 与呂志 雀踊子 柳宏子

母チャンが

へ汚職のわなが待っている

番こわい東大出

陽のあたる場所にエリート

一何時もい

たいる

エリー

トも落語聞いてる寄席の席 れるものとエリート トで歩み道草したくなり

知らなんだ

遊萬

エリー

学生の気質エリート未だ抜けず

白渓子

つの願い負いきれぬ

騒音の街で孤独と言う暮し

かたくなに辺鄙な旅を愛しぬく

惜しくも歩く道がない

明白

しい身分が来ている喫茶店

神棚でしばし仮眠の宝くじ

川柳塔まつえ

叮紅報

みずほ

鉄花人

塞 應 楽山男 禁煙を棚の灰皿が笑ってる 巡業の前座で故郷の土をふみ 外泊のその後夫婦に深い溝 テレビには前座の笑い写らない きせる持つ手付き前座のぎこちなさ 万引もあるなと思う棚卸し うますぎる前座師匠の気に入らず 棚畑が山に戻った開拓史 隠し芸前座の方が美声あげ

登美也

愚三 俊治郎

政治家の舌には嘘が溜めてある よく舌の廻る女に丸められ 外泊が不幸なふたりにしてしま

17

71

初恋を炎の中へソッと捨て風むきが炎東へ持って行き 煙から炎が見えて火事になり わかあゆ川柳会 小砂

山河あり一途に炎えた青春譜 炎えつきるまで煩悩を抱きながら

白汀報 タケノ

はるみ

17

小松園

鬼瓦先々代の苔のあと 鬼瓦持たぬ家にも来る夜明

お隣りに負けてはおれぬ鬼瓦

度 游

北海報

カンナ炎ゆ人妻おんな盛りかな 町中をうわさの風が吹きわたり

柳ウイロー社

前山

心微塵なく請求ぽんと投げ 心が通じすっかり誤解とけ

60

叮舞

40

孤呂

下手な字をほめて真心こもっ 真心のこもる看護で床払い 亡くなってやっと気がつく真心に 真心の生活実り今日の幸 真剣に祈る心に神の声 真心も無いのにらしく喋ってる 真心が通じ誤解は日本晴れ 真心を糸にたくして編む乙女 心が通じ涙の顔を上げ

包紙派手に真心偽装する 城北川柳会

眼を病んで妻の真心身に染みる 真心のこもる言葉にほだされる 病床へ真心こもる花が咲き 真心の信念一生まげられず

ほどほどの高さへ柿が熟れている Ш

> カロ女 万里步 カロ女 生山石 悪口もほどほどにせよ咳払い ほどほどに替ってほしい長電話 ほどほどに又明日がある畠仕事 ほどほどと云う字を知らず物価高 ほどほどの出来で望みは託されず ほどほどにしたらと受験の子を案じ ほどほどに出来ずきびしい道を行く 軍拡もほどほどにせよ総理殿 妻の愚痴ほどほどに聞き靴を履く とことんの父ほどほどの母に負け

良

弘風紅生報影渓 思い出の写真も今では色かわり 思い出もそれぞれ八月十五日 摘み草の栞となりて古日記 戦争の思い出しかないわが青春 炎天下笠をきせたい野の仏 夏やせもほどほどのうち秋が来る

英壬子 左捷

テルミ きくみ ますえ

T

反骨は歴史を飾る一頁 豊葦原瑞穂の青も狭められ 生命線まだ伸びそうな顔洗う

雅号ぶっちゃけばなし (193)私の東天紅 のものである。 の号は川柳を始めてから 当時、 毎日新聞に麻生

とうてんこう

井 阪 東天紅

> 天紅) している。 柳雑誌」にも投句、 目だったか入選、 て見たが良いのが浮ばず、週刊誌のどこかで見た(東 投句するからには本名より雅号をと、あれこれと考え らの投句に当てていた。私はこれに投句をはじめた。 路郎先生の選で「毎日柳壇」という欄があって読者か が閃き、これを使うことにした。それから何回 嬉しくてうれしくて、 川柳塔に替ってからも東天紅で通 それから

早く佳句を得て陽の目 七十二歳

近年佳句も浮ば

LI

4

か

を見せてやりたいと思う。

雅号にすまなく思っている。 思えばこの号との連れ添いも永い。

> 旱魃へ神主さんもたのまれる 終戦日思い出つきぬ十字星

洛酔報

三十四

としよ

貝がらが標本箱を海にする 消印に二人の幸がこぼれてる 吉野屋のオレンジの灯暗くなり セールスが夕日に祈りノルマ追う 百度石一願づつの重さ積む 折り方によれば紙にも癖が付き 幸せが素通りしそうな叱事言う 出向と云う名のもとで島流 西岡

あざやかな分だけ実印憎まれる 父ちゃんの出世白髪とシワが増え 出世した息子は地球の裏に住み 東大出と云うのに汚職の波に消え 勲章もバッチもいらぬ菜きざむ 重 笑 比呂志 三十四酔 希久志 与呂志 淳道喜弘 本蔭棒 真佐志 水

鬼になり仏になって教え込む 五輪にすね訓練の腕泣いている 主水報 ミツエ 小松園

声割れてから本当の浪花節

南海電鉄川柳会

茶柱が立って憎まれ役も買い 戦争が憎い八月がやってくる

訓練で目となり手となる白い杖 身障の訓練はけます方の友も泣き 女

訓練がとんだ急場の役に立ち

練の成果をみせた甲子園

まあまあの奴が集まる同窓会

内心を読んで傷にはふれずおく 忍従に堪忍袋もつぎだらけ紙袋パチンと自我がとび散 風船の保護者は細い細い糸 風船と鳩セレモニー派手にする 風船の自由 内容は知らぬがゲストの名にひかれ 弱腰は日照権の蔭で住み 弱腰に金の力がさせている やっぱり弱腰になる惚れている 手内職一と呼吸ついて又つづけ どこまでが本音呼吸が乱れてる ひと呼吸置いて拾った札かぞえ 訓練のつらさ母には知らさな 人気あるゲストの面に翳りよむ ゲスト席淡谷のり子がでんといる 灯を消せば女の呼吸聞こえそう 若者の呼吸は明日へ弾んでる 太鼓判押す人よりも押さす人 太鼓判押された男の使い込み 猛訓練流した汗にない結果 盲導大訓練の果て主の手足 しごかれた頃の訓練思い出し訓練に目星をつけて打順きめ 人学に家族ぐるみの太鼓判 南大阪川柳会 真面目な顔が頼母しい 様にはいかぬ縄梯子 和を委ねる原爆忌 、紐がからみつき 滋雀報 あいき 好好 凡九郎 頂留子 千万子 雅勝 右 恒 信綾正 1) あごあげずがんばれサイン力入りそれぞれの足心得た高いびき 身の周りきれいに再起の賽を振る 仲人の足の重さに知る返事 来年は咲くぞと植木屋言うて売り 肩書を誇りに老いて駑馬となり 卒業を見合わす一人息子よい 終りなり煩悩の途に独り居る 煩悩が今朝も私と起きて来る 煩悩を払えば私の位置がない 見舞花きれいな嘘も添えてある 愛憎の振り子眠れぬ夜となり 煩悩を消す消しゴムが見当らず 浮世絵の指にきれいな嘘をみる 使い捨てでもよし老の身を生かす 身勝手な時だけ老人らしくして 祈る気で誤診であってと待つ返事 内心は馬鹿にしていて褒めている 陳情の要らぬ鉢巻前で締め やりくりで掛けた保険で助けられ 生返事後で重大な鍵となり エプロンを丸めて妻の生返事 赤信号きれいに別れる言葉選る 指切りに君のきれいな嘘がある 委せても良さそう返す目がきれい 歳月を縫うてきれいに光る針 切の煩悩捨てた骨の量 虹川柳倶楽部 天子報 実 三男 凡渓は裕能水む美 すみ子 紀久子 登紀夫 紀美女 武 ŧ 太茂津 文 美み史女男子楼 人生の流れの中で耐えている願い星ことばを探す間に流れ 母の愛こぼして手紙の封を切る 手紙書く心はとっくに逢うている よどみなく流れる水に習いたし アルバムに時の流れをとり戻す 週末へ熱を出す子に気がもめる 週末へ家事貯めておく共稼ぎ 週末は専業主婦になる私 働いた汗はタオルが知っている 浮き雲に国境のない広い空 うなづいて無口の父の重み知る 古手紙記憶の糸がよみがえる 追伸にちょっぴり本音の出た手紙 中年や首の深さへ流される 蒸しタオル時が暫らく静止する 旅の宿倖せ包むバスタオル 山の子に海の広さがこわくなり ポケットの金貨が騒ぐ赤電話 買物が上手になって子の帰省 離農する背に一面の稲の花 企らみがあって浴衣を粋に着る 商売にひびく心の浮き沈み 妻の手におちて他人の金みたい 断絶の父子へ母が気をつか 幸せを願う無口の鈴を振 叱られた孫の手を引く祖母の愛 大売出し年に一度とまたも 勝山双葉川柳会

一月の飴落ちていた霞町 土井勝煮物へ母の味を説き 土井勝煮物へ母の味を説き 勝敗の流れを変えたホームラン 世の中は良きリズムに導びかれ旅日記一つの秘密伏せておく 先代は真面目二代目浪費する建前は真面目本音はそれなりに 真面目さが取り得父ちゃん下積みで飴玉のロ一杯へ電話鳴る 七色の飴玉都会から届く 人生を流れる儘に浮き沈み 老いの血を湧かす軍歌のよいリズム 風鈴の風に逆かぬリズム持つ 空の旅こんなに狭い日本地図 養虫のどう生きようか真面目なり 飴玉にふざけて猫は持てあそび 爪染めた女真面目な私生活 猪を煮るとデカンショ節が出る 杯のあめ湯に夏を惜しみけ 面目さがいまだく 岸和田川柳会 言いそうだから 涙は虹の彩 映える円をかき 目と思う失意の日 JII かる恋の傷 谷垣 聞き流す 植山 助報 武 白 希 時 光 六 志 雄 みずほ 史美瓢柳 好女太伸 小好東サ 松 天 園郎紅ョ 好 春 儀岳勝酔 みずほ 千代三 号令をかけると独楽は回りだす 葉巻ぶかぶか金持の孤独感 リンドウのあお清浄な部屋にする ノックするドアの向うに明日がある 値上げする度に古米が増えてくる 敗戦の脳裏業火は炎え続け 金持の奥さんかいな田舎弁 生命の貴さ白寿も炎え止まず 老詩人奥の奥では炎えている 掌の上で金持地球儀をまわす 真実を知って炎えなくなっている 明日枯れる花と知りつつ夏の水 金持でないと地主は子を躾け 雷の太鼓は破れることがない 太鼓鳴ったら戦士の顔になっ その羽毛その声カナリヤが炎える 炎えさせぬ理性が憎いと思う日も 炎え切らぬカンナ花火に嫉妬 コンパスで描いた円は律義すぎ 大都会四角い空を見る地蔵 金持も庶民も同じ花の色 金持の夢が踏まれるはずれ籤 カードより凶器で銀行金を出 の僧挨拶抜きで経をあげ オー 中の阿呆を集めて阿 も帰る不運の甲子園 エスケー川柳会

すぐな背すじが支えているこころ いる 博泉報 満津子 富志子 およら子 **第三郎** 操

見物の輪から太鼓につられ出る

しに表とくる

百合子

リズミカルな太鼓に 夏祭り太鼓だけ鳴る過

になるとタイ

すく

(り返るのはよそう屈折の多い道)ズミカルな太鼓に明日を祈る声/祭り太鼓だけ鳴る過疎の村

千一亜秀安雅

扇成川竹洋

右 あ野 博 柳 亜 英 晴 亜 光 い ち 生 泉子子子 風 鈍 夫 一つまり メリー 風車回る光に友がいる 石油ショックへゆっくり回灯火で思い出回る走馬灯 金持ちから順に集めて回る寄附 宵闇に命を見せて飛ぶ蛍 ストレス解消そうめん流

かする

佳 句

地 10

選

前月号から)

い手を透き通る蛍の

匹の蛍に家中電気消

ペンダント二人の気持離れさせ ゴーランド孫を相手に乗ってみる

っている水車

男

美佐子 てまり

田 太 選

どん底を知る人にある暖かさ宗教も地に墜つトラブルまた起り病 底 の 都 は 憂き か 平 家蟹 ジャンボくじ当ったような総理の座 底の都 え尽きる時かローソク音を立て じきる幼い目には背けない の余白に 葉柿の赤さに負けていずの 都 は 憂 き か 平 家 蟹生きる誇り妥協が許せない ひそむ母の声 右みず 紅智萬杜薫 近ほ 月子的的風

T 大坂

いいいつ

ぱい生きて昨日が今日となる

形水報

燕 三千子

子に叱り孫には甘いお婆ちゃん子に小言孫には甘い顔ばかり子に小言孫には甘い顔ばかり助け舟出るか出るかの甘え顔 不粋者甘 毒舌へ腹の底まで憎めない 天職に殉ずる心の尊かり 天職の菜っ葉服が似合う父 天職と悟った日から愚痴を止め 顎髭の白さ善人自認する 健康な寝息明日を信じてる 釣り好きで魚偏の文字書くデスク癖のない男で一生独り者 ラジオ体操で早起きの癖がつき手料理は甘さを減らす祖母の味 手料理は甘さを減らす祖母の味甘い顔見せずにおれぬ孫が来る 浮気者甘 子の親になっても母にまだ甘えばあちゃんは甘いと孫に値踏みされ 新婚の甘さ花火のごとく消え娘の晴着親の財布が甘くなり 毒舌を吐いてストレス解消 甘えるな鏡に恐い顔をする 太鼓だけ 年が早く感じる歳となり を血筋通りに跡を継ぎ しの甘さロー 一柳後楽 愛妻ランチを今日も提げ 北川柳会 い言葉を使い馴れ い二人に水をさし 本物テー で盆 踊 知川 1) 上柳五郎報 人 三十四 番七哲 柳五郎 ますえ テルミ 満津子 きくみ 生報 宏 fili 健康な会釈ジョギングすれ違い 傑作の中に苦労も刻み込み 要するに傑作なのは俺の顔 邪魔者にされても長生きしとおます 委せる気のぞかせ無理を一つ云い 平役で非凡の大器埋もれてる 丸刈りの孫はなりたてのメロンめき 勲章に輝やく義肢でくたびれる 終電車生活の紅を女拭く 嬉しい日娘は赤い靴にする 停年へ妻も覚悟の財布しめ お祭の鉢巻日本人の顔となる 鼻歌が途中でもげた上機嫌 上機嫌ですねと巡査に皮肉られ 上機嫌写真の顔もゆるんでる 負け犬の屁理屈後が続かない 理屈だけ一人前の子に育ち 傑作は本屋の隅で眠ってる 上機嫌祭り太鼓の冴える撥 上機嫌明日は雨だと影の声 理屈言う潮時待っている末座 理屈抜き好きなんですと娘言 理屈通り行かないから面白 毒舌に女は耐える術を知 毒舌を背に受け苦い酒を飲 せは期待通りに子の巣立つ 事も小理屈こねる癖があ 川柳大阪 代歳それなりの美を保ち r) 11 ti. 西尚 40 洛酔報 比呂志 本蔭棒 与呂志 六龍子 三十四洸 久米雄 梁幽照紫秋た 佐加 太谷路峰月志恵 玉元鮫青胡草 虎銅 風風 真佐志 洛 雅 喜 定 敏 峰 酢 巣 秒針 茶柱は立てば立ったでうれしがり 安いお茶汲むと茶柱二つ三つ いい夢になるか茶柱うごかない 茶柱のあてにはならぬ日がつづき 茶柱にはずみがついた今朝の靴 茶柱を鼻であしらう子に育ち 連絡船生のニュース持って乗り 水上のペンに近江は美しく 近江富士車窓へ姿変えて立ち たそがれの湖畔へかすか三井の鐘 書き渋ることあり西日強くなる 建築費しぶった分だけ手抜きされ どうせ出す祝儀を妻は出ししぶる 金魚すくいに袖をぬらした夏まつり 遠花火眺めて女まつり好き 鯛船の復活を聞く夏祭 おみこしも汗かいている夏祭 松風の音に匠の心きく 門が雨気を呼んでいる重み 夕焼がいいから空に手を上げる 思うこと猫に話してあくびされ 子に嫁をもろたら母 番傘の似合う近江路ひとり旅 一生の恥は覚悟で聞かずにい れ違い夫婦にメモが愛つなぐれ違う夜勤早出の共稼ぎ れ違う歩巾へ男振り向かず の止 南海電鉄川柳会 京都塔の会 めておけるものならば の城 がほし 圭 小 松 園

- 64

白白萬和明飛孝求潮紫杜美 渓 子杏的友代鳥江芽花香的種

花代子

笑道淳

聖林子 客

王芳三

石

千万子

勝

嫁った娘の電話の声で知る暮らし 声のないところが真実しっている 別荘を持って借家に住んでいる 負けまいとしている声がでかくなる 商品として日焼けの肌つくり 聖人も時には妄想するだろう 去年程水着のあとのない冷夏 別荘が本宅になる斜陽族 歩く子に日焼け気になどしておれず 桃色で売ればもうけの女坂 別荘の主が被告の席にいる 天の声何時か自然が怒るだろう 太陽に負けぬ人夫の焼けた肌 日焼けした腕で支えている生活 初め好し三日坊主の稽古事 フラブラと三日坊主はパチンコで 全柱が立ったと電話声はずむ 見合席茶柱そっと袖に入れ 条柱の見事に立った嫁ぐ朝 退院の朝茶柱に見送られ 真心で出す茶柱がよろこばれ 条柱に大きい夢をかける朝 条柱が立って一日爽やかに **条柱に一人にっこり微笑んで** 条柱立ったうれしさ顔に出る 条柱も笑いの裡に旅仲間 二日坊主とそしった禁煙ほんまもの 糸柱を左の袂に入れる母 宅追われて初老の別荘番 の声も片寄りかけてくる オーエスケー川柳会 形水報

信 東善 とし子

維久子

昌

さゆり

儀

ミツエ

白圭綾泉

美佐子 野有亜 百合子 夢

> 愚痴云えば悩みの一つ消えている 方舟に積んだ悩みがこぼれ出す 真剣に悩むと死神寄ってくる ひょっとこもおかめも悩みあるだろに 悩んでるかと思うとステレオ派手に鳴り 悩むだけ悩めと蓮の花が咲き 早合点自分を笑えない喜劇 合点のゆかぬ言葉で米をとぐ 家元の鋏合点させられる 天の声心の声を通 り抜け 出 あいき 報表記 雀踊子 明 郎

定退のあとは人生のおまけかも 悪妻になろうなろうとする積木 曲ってるだけの胡瓜のランク落ち 突き当りおまけに足まで踏んで行き 子供からまず誘惑をするおまけ 積み直しきくから積木がいやになる 積木つむ終りの一つに賭がある 旧家としてのランクをつけた苔の色 幸せのランクは笑いの数できめ 文 智慧子 凡九郎 柳宏子

銀行がくれるヒントに金が要り 脱皮するヒントは恩師のひとことに 川柳たけはら 商居報

かつ子

光

男

地

傾いた会社へ西陽まともなり 超高層やがて傾くとも知らず

負け犬が大きく吐いた捨て科白 ピッケルよ山の掟をだませるか

合唱へ見えぬタクトは妻がふる

空間をうめる私に趣味があり

アリ殺し使いたくないけど蟻よ 妻病んで妻への愛の確かなる 酒よ酒よと孤児になること多かりき 良い嫁と可愛い孫がいる夕餉

傾いた心へ自問自答する 休日のパパ起されているけじめ 老夫婦今更相性見て笑い

気易く呼んでくれる先輩の有難 友達もやっぱりきてた夏まつり 歩行器のコロコロ行きたいとこがあり 変身をした自画像の瞳のあたり はぐれ雲明日の風にかけてみる 一家団欒事故のニュースの多かりき いのちありけりひたすら廻れ 才に個性ありけり盆おどり 一つ投げればこわれゆく愛か めくりに 走馬灯

はやる気を活字にしたら俺の負け 集団のありはけじめを知っている 札束に傾く顔を見られたか 読んでみてよかった本からもらうち 山はステキオーイと呼んでみる どんぐり川柳会 史好報 直 水美 3

傾いたままの歳月持った塔 傾いたままの地球と思われず 裏道を歩く男にかげがある 傾くと一気可成の船 太陽が傾き人間取り戻す 借金を返すと傾くねぎ坊主 まだ借りがあり傘を傾けて 六法全書に少々傾き過ぎたひと 家運

史み柳儀瓢酔薫勝万鎮 好ほ伸一太々風美里彦 小松園 寬鈍蘭不笑菁節秀 郎 子子舟幸朽子居夫夫

募 集・

帖 抄 塔

(3句

橘 菊 中

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。 点 開 用紙はなるべく柳箋をご使用ください。 樽 題 字 運 吟 各題5句 本 規 不 晴 風

庫

選 選 選

月 号発 表 11月15

JII

10 10 旬

生

締切

松園 17 庙 選 選 水 Ш

> 煙 柳

抄 塔

3句 10 10 旬 旬

橘 菊

薫 小 生

風

選

1/5

寒 有 見 題 名 4 各題5句 原 内

字は楷書で新かなつかいにしてください。 ★原稿は四百字詰原稿用紙 神 夏 磯 に四枚以内。 独 7 仙 選 選 選

月 号発 表 締 切

中

17

庙 園

一半年年

分

四

百 百 送料29円

円

送

千千 百

五

料共 共

定

几

11月の常任理事会は6日5時から

〒542 印発福 大阪市南区 刷行集 大阪市 所人兼 藤 中 鰻谷中之町 鰻谷中之町 原島 童 蓬

通預金口座番号

昭昭和和 五五 発行所 十五年 振替口座 大阪・三三三六八番電話 大阪(0次) 三十 一三九八五番 ++ 月月 - 五日印刷 太 番 番

郎

本社十一月句会

会席 費題

三百円

顯

★投句だけの方は切手百円封入

題

柳

電話 271 271

3

9

会 日

場時

+

月

七日

金

後

公時

東

町

10

車 3

東スク 5

当日 1発表

家無

色

正野香江 各題三句以内厳守 本村川口 水 茂津 度

★電話での投句や訂正はご遠慮願います 大阪市南区鳗谷中之町20

柳

12月の兼題

JII

塔 社 ラッシュ」 三りんぼう 伏線 悪夢

お願

15

原稿は本社へ

新年 締切十一月二十五日着便まで JII

一号を飾る 私の

句 今年中に発表されたも

段分が二千五百円です。よろしくご協力のほど 申し上げます。 五百円 塔社 (縦3・3 m横2・5 m 同 人 総 参 原稿締切は11月25日 加 大。 五段の

柳

賀広告受付 !

肉体疲労時の 脚気 タミンBi補給に

と今まで

んなたべ ありを

を書き送

がたいことで

ットに

1

に関する書籍やに関する書籍や

か

複そうしても、 の方に依頼を

火急に

原

稿

いに持参 心稿や資

1:

☆筋肉痛・肩こり・腰痛・神経痛の緩和に ☆アリナミンA25ミリ錠のほかに5ミリ錠 タケタ

おらな

60

to

療養下手

☆ 立 草 に 元 こ

られた糖らそんが たれた糖らそんが たれた糖

台今年一月号の 書望るのりおも 願 でとうごさ 張り には、 っます 月号の 大さんだ すからよろしくさいます。今年 あけ が九月のが大月 である。 ペン ま ti は中大らかに

ずから甘い ヤに ひと口がある い声が まさに云々とあ 八月号で -がややかすれる。とも書 いる。 進行して おられるので 食 べて、 意をさ い物い実 は、 は、「各地から 実柳酸 b あ れ 病気は まりのう 3 糖頭 また水 いる に食べ を食

かの朝 れられため、生の月 4: n は複そうしても、少ほかはなかったので させる を運 3 入院 常任 は 発送 . 理事 ぶよう任 後 突然 の編 0 との の日に家族 継ぎの諸 b 17 0 申し され ことでもあ で、 たの心 出に従う

夫さん

心に事

であ

3

自身の体 とである。 とである。 にのではなかろ にのではなかろ でけるかって行く。 てれとは別の神でれるかったの かこっ バンフ い誌かと合淋さど、 ŧ. で、 公同 かたちとな して 合が分ら 意し しても九月末まで集 三いの人 別に 人特集 細 一大きんは 一大きんは 一大きんは 一大きんは ずぬ 集部員の揃り to 集 - 10 新 状 旬 働くう 態 より るかの河流 いの 71 ちりあが良あが だっ 背景 ったのは 戸田古方 のこ to いいるに な雑。こ かたりに

電話を受けて ての 態 だが続いて病院 py

にゲス

トテ

出レ 3

演ピ

はみ

る弓削

大阪・神戸・京都・宝塚を 最も便利に結ぶ 5005

大方のご支援をお願いすな一三夫さんのなさって会一三夫さんのなさって会に追われ通しだったが問に追われ通しだったが問に追われ通しだったがいまないなければならないった。これをはならなかった。これをはならなかった。 れるものの 気回復されて、 られたことだろう。 さまざまの思 どうも 出向 のご支援をお願いするに大きないったのでを持をいった。これを長いかがある。これを長いながったが好ればならない。 りるこ 00, どうも れる 心いを残 と言って を祈る の今後に ぐせ してお 集 0 する高校のアメ する高校のアメ もた。 を散 薬の 高い らしたようで、 所 色とりどり ことを から見た選手たち 戦 てとを思い出し、新 が野球を短歌に、誓 が野球を短歌に、誓 が野球を短歌に、誓 を見た。 あ 3 ることの 0 観覧席 と大学 カ カ J. 秋の フセ フ

12 は 00

集

にだ経の 負ろ痛痛 けうにみ

す新ん智

南紀 和歌山 四国でのお泊りは

《ホテル・旅館》

白浜温泉 一忘れえぬ はまゆうの宿

政府登録国際観光ホテル ホテルパシフィック 政府登録国際観光旅館 鳴門

政府登録国際観光旅館 朝日

勝浦温泉 海に浮かぶパラダイス

政府登録国際観光旅館中の島

湯峰温泉 山のいで湯で山菜料理 政府登録国際観光旅館湯の峯荘

和歌山・新和歌浦 海岸美が楽しめる

政府登録国際観光旅館 萬波

徳島・鳴門―うずしおの宿

政府登録国際観光旅館鳴門公園ホテル

紀北・橋本 -- ゴルフの宿で季節料理

観光旅館

紀の川苑 大阪・泉南淡輪――魚つりに ゴルフに

観光旅館

淡の輪苑

大阪・なんば――清楚で近代的なホテル ホテル南海

お間合せ・お申込み ■ 南海国際旅行・日本交通公社



